
ハッピーツリーワールド～ロンワン編～

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハッピーツリーワールド〜ロンワン編〜

【Nコード】

N1368I

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

突如、帝国建国を目論む帝王バグバグ大王六世が送り込んだ謎の組織HOV彼らとの戦いが始まるうとしていた。幾多の戦いを乗り越えたみんなだったのだが

ブローグ 最大級の始まり（前書き）

パロディが含まれています。ある意味スペシャルゲストが出る可能性もあります。原作以外のが、ですのでしっかり読んでくれたら幸いです。

プロローグ 最大級の始まり

ある朝、モニターが四大世界と全宇宙と幻想郷に出た。

「御機嫌よう、愚民共、我が名は、バグハグ大王六世。前世が成し遂げられなかったことを果たしにきた。」

カドルスとフリッピーはそのモニターを見ていた。

「貴様らに、教えてやることがある。近いうちに故マルガリータ帝国を超す帝国、バグハグ帝国の建国時期となった。多数の兵士を呼び、逆らった者達を刹那している。すでに四大世界と全宇宙と幻想郷は支配した。逃げることはできない。反逆者には絶望をプレゼントだ。さあどうする。我輩に、忠誠を誓うか、それとも反逆をするのかは愚民共の自由だ。」

フレイキーは震えていた。

怖さが半端ではない、威圧感がモニターを通り越して感じるからだ。四大世界について解説しよう、四大世界とはリアルワールドとデジタルワールドとビットワールドとハッピーツリーワールドである。

リアルワールドは、エジプトや日本やアメリカがある世界。

デジタルワールドは、デジタルモンスターが暮らす世界。

ビットワールドは、ビットワールド生命体、略してビーボ達が暮らす世界。第二のデジタルワールドとも呼ばれている。

そしてハッピーツリーワールドは、今は、無いが、かつて惨劇や悲劇を作り上げその世界の住民を痛めつけていた世界。またの名を血塗られた狂気の世界と呼ばれている。

リアルワールドに身支度の最中の、者達がいた。

「大佐殿、ハッピーツリーワールドに引越すんですか、カドルス達が歓迎してくれるか心配だ。」

「何を言っている、コニシキソウ三等兵、歓迎してくれるさ。」

「ってなんで口と鼻に割り箸突っ込んですかー大佐殿」

この二人は、植物の戦争で平和をもたらししている者達だ。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、平和が好きな吸血鬼、仲間に対しては、優しいため、みんなから大佐殿と呼ばれ支持率が高い。ただし、平和を汚したものを彼が見てしまうと気がふれて、平和を汚した者を殺戮してしまうのである。体に平和を汚した者達の血が付くため、軍人のスカーレットデビルと呼ばれている。今年のキングオブハジケリストを惜しくも逃した。吸血鬼真拳の使い手

コニシキソウ三等兵は、ニシキソウ属に所属する者、とにかくニシキソウ准尉とは犬猿の仲で困っている。トウダイグサとの仲はすこくいい、テリハニシキソウを追っている。九尾真拳の使い手

「十字架を磨くってたのしいなあ」

「そうなのかセルインジー・キリスト？」

「そうさ、君はフデイストモンキーって言う名前だからわかるよ。仏教信者には、分らないキリスト教信者の大いなる気持ちがあるんだ。」

セルインジー・キリストはにつこり笑っていた。

ブティストモンキーは確かにというような溜め息をついた。

「確か、セルインジーは、キリスト真拳の使い手だから、僕の仏教真拳との相性が問題だな。」

「フリッピーさん、バグハグ大王六世の威圧感が怖かったです。」

フレイキーはまだ怖がっていた。

「フレちゃん、僕たちに任せれば、大丈夫。みんながいるからさ。」

「うんっ。」

リアルワールドの側らで戦闘があった。

「理数系真拳奥義√八百壱」

「ぐわぁー」

何体かの敵が倒れていた。

「口ほどにもねえーな」

男の名はサイエレンスという百年前のハジケ組で、総長である。初代キングオブハジケリストでもある。理数系真拳の使い手。

「極悪斬血真拳奥義パローエムリケア」

敵が倒されていった。

ルシファー・セイバーを使う者、アングル「水素だ。彼は、元素集団の一人であり、人思いである。武士なためか、一人称が拙者。

まだ仲間たちがいる。

一方ユニクロン内部では、バグハグ大王六世が、とある軍団を呼びたした。HOVという組合だ。

「お前らに、ハッピーツリーワールドの監視をしてもらつぞ。」

その中でリーダーのロンワンがいる。

「了解しました。六世様、ハッピーツリーワールドの監視は我々にお任せ下さい。反逆者を見つけた際は即刻、殺りますので。」

「ではすぐに準備し逝つて来い。」

「はっ」

「では我々も、建国に近づくための準備でも整えようか。」

不吉な出来事が始まろうとしていた。

みんなはハッピーツリーワールドに行く準備が整い出発した。

四大世界に行くにはどうしたらいいかは、時空と時空がある程度重なったときに、できるワープゲートをくぐればいけるということである。一日で24回も起こる現象なので一時間ごとに発生する。

ワープゲートが現れた。

みんなが入り込んだ。

ハッピーツリーワールドは今は、きれいな世界なのかは分からない。

新しいストーリーが始まった。

次回予告遂に始動ハッピーツリーワールド〜ロンワン編〜

プロローグ 最大級の始まり（後書き）

次回から本格的にスタートします。

第一話 引っ越し記念パーティー（前書き）

ここからオリジナルキャラクターやほかのアニメのキャラが出てきます。

第一話 引っ越し記念パーティー

トウダイグサ・スカーレット大佐達を待っていたかのようにカドルス達が来た。

「トウダイグサさん、待っていたよー」

と呼んでくれたのはカドルスだ。朗報活発な性格は、時には命を落としかねないというのに。

ポーボボは何かすごく汚い匂いを嗅いでいた。

「何だこの世界、血の匂いがするぞ。」

ペチュニアはこんなこと言い始めていた。

「血の匂いって、この世界確かに残酷だった時の匂いが残っているわね。」

銀時は何かを見つけた。

四代目闇影うちはドルレインも気にしていた。

「あれはいつたいた何だ。」

ハッピーツリーワールドは開拓のブームになっていた。

血の匂いは薄れつつあったという。

「この世界は、昔とても、残虐な世界だったの。」

「それを毎日毎日繰り返されるですう。」

タカトウダイ中佐も納得した。

孤独がないただ残酷かつ鬼畜な世界だった。

ハッピーテンションズハウスがあった。

ここを拠点地にして、バグハグ大王六世の脅威を壊すという。

その前に宴があった。

サイエレンスは、楽しそうな顔をしていた。

いろんな仲間が、宴で酔いしれたあと、タグラは起きていた。

うちはドルレインの弟でうちはタグラという名を持つ。

「なんだあいつ等は」

「news In hear」

「yes」

謎の声は夜遅くまで続いた。

タグラは寝た。

明日は、開拓に参加できるからである。

ロンワンの脅威が近付いているのにもかかわらず。

フリッピーはフレイキーと一緒に寝ていた。

おそらく夢の中でデートしているに違いない。

第一話 引っ越し記念パーティー（後書き）

申し遅れましたが、はじめましてです。最強な二次創作小説ですが、今後もすごい展開が起こりそうです。次回は謎の男つまりロンワンがついに行動開始。オリジナルキャラクターも結構登場しました。うちはドルレインとトウダイグサ・スカーレット大佐は、光の闇九人衆の者です。

第二話 開拓しよう！（前書き）

ギャグが登場します。ので腹がよじれるほどの笑いに要注意

第二話 開拓しよう！

歪んだ世界の空気は、今消えつつある。

ハンディは公園の開拓を先にしようといった。

この公園は、多数のキャラクターを殺した公園。

「この公園は、まだ、においがする。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は滑り台に着いた血を拭き取った。

「固まっているな、ということは結構時間がたっているのか。ペロッ」

首領パッチはびっくりした。

「舐めやがったー」

トウダイグサ・スカーレット大佐は吸血鬼なためこんなことは仕方がないのである。

「んーこの味は、この味は、はつきり言って辛いわー」

天の助に向かって火を噴いた。

「ええー血舐めたあと、火を噴きやがったー吸血鬼だからかー？」

女性陣は暗い顔をしていた。

「かつての戦いがよみがえるところだった。」

タカトウダイ中佐はあることを言い始めた。

「トウダイグサ・スカーレット大佐殿は、平和を崩す者が大嫌いで、穢した者は、其ノ生を引き裂いて赤銀を吐き消し飛べ、その生の華を散らして極彩に咲き我が糧に、其ノ生がお前ならば平和を穢したならば喰らい尽くして血肉にす、其ノ生を我に渡し、平和クズした罪償いをした後、お前を俺が赤く染める。甘いその赤いものを私に寄こさないならば殺してあげる。って言っているので逆らうことは許されません。」

「こ、怖いであります。トウダイグサ殿って……」

ケロロは物凄く青褪めていた。

ボーボボはあまりにの恐怖に、害虫になってしまった。

「何でー」

ツツコミを入れてくれたのは、ギグルスだった。

フリッピーは、あることを思い出しどこかへと行ってしまった。

ハレクラニも恐怖をすごく浴びた。

トウダイグサ・スカーレット大佐はかつての戦争のことは、忘れていなかった。

懐かしい壊れた平和を元通りにするため、決つたり、殺したり、戦場を真つ赤に染めたり、その甘い血のにおいに誘われていたあのころをトウダイグサ・スカーレット大佐は、思い出していた。

開拓は、終了した。

ケロロは、ずっと蒼褪めたままだった。

トウダイグサ・スカーレット大佐が声をかけた。

「ん、どうしたケロロ顔色が蒼いぞ。」

「何でもないであります。トウダイグサ殿。」

フレイキーはフリッピーがいらないことに気づいた。

「いないですう。フリッピーさんが」

銀時はこういった。

「フリッピーなら、あるものに会いに行ったが。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は魔槍クラウ・ソラスを召喚して、振り回して、自らの鍛錬力を強めていた。

「これなら、バグハグ大王六世も、殺せる力が得られる。」

フリッピーはあるものに出会った。

「ロンワン、お前の言っていたものを届けてやったぞ。」

「久しぶりだな、退役軍人フリッピー。」

「何が目的で、こんなことを」

「知りたいか？」

フリッピーは怒りを溜めていた。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、突然襲ってきた敵の血を舐めていた。

「此の程良い甘さは、俺のお気に入りだ。」

第二話 開拓しよう！（後書き）

残酷描写がありましたことをお詫び申し上げます。次回予告謎の生き物が現れる。

トウダイグサ・スカーレット大佐って平和主義者なのか？彼はこんなこと言ってます。紅き平和願望七条約と言っているんです。

第三話 謎の生き物（前書き）

ナッティーのギャグに注目してください笑えますよ。

第三話 謎の生き物

フリッピーはずっと苛立ちを隠さないでいた。

「ロンワン、お前いつからそんなやつに。」

ロンワンは無言だった。

フレイキーは眠たそうでツンデレ気味な顔をしていた。

「ふぁーーーーー」

「フレイキー眠いの？」
心配をしてくれたのはギグルスだった。

「一週間、フリッピーさんのことを考えていたら、59時間も寝て
ないですう。グスン」

フレイキーは涙をこぼし始めた。よっぽど寂しいのだろう。

トウーシーは何かを食った後ランピーに文句を言っていた。

「不味いよ。ランピー」

ランピーは逆キレした。

「何だよ。僕が、作った料理の何処がまずいんだよ。」

銀時は気にしていた。ランピーに話した。

「ところでなに混ぜたんだ？」

「うーんと、キムチだろイチゴジャムだろそれにマヨネーズだよ。」

意外と吐きなくなる。禁断の混ぜ合わせだ。

土方が、そのことにびっくりした途端、誤って、近藤にラリアットを喰らわしてしまった。

近藤はまるでニョロモの腹みたいに目を回していた。

ミーミーは近藤を見ていたが、途中から冷たい顔で見た。

トウーシーは、顔を真っ青にして苦しそう感じた。

カドルスが、トウーシーをベットまで、誘導して寝かせた。友達関係なので、優しいのは当たり前。

ペチュニアが、ランピーの頭を殴った。

ランピーは、女の子に怒られると、謝るということがある。男の子

に怒られると無視をする。

ランピーは、以外と最低なキャラである。

首領パッチはハッピーツリーワールドの目薬を使っていた。彼は最近、ドライアイになっているらしい。

サイエレンスは、なぜか、モグラになっていた。

「アタック」
「ぎゃっ」

オモシロカシイことをするのは親びん同士だからなのか？

電気屋さん、ここは、ペチュニアが硬貨のマシंगンを喰らったあと、ロケットの先端部分が突き刺さり命散らした場所である。

「ここは、面白かったわ。いろんな電気があつて、でも、今は、こんな有様、壊れている。」

それにこの店長、これを見た瞬間、毒薬を飲んで自殺しちゃったのよ。」

それも悲惨だ。

ナツティーが喋った。

「自殺そんなバナナ、ちなみにバナナに砂糖を少しだけかけてからチョコクリームに満たして喰うとおいしいよ。」

全員が

「今、そのことを言っている場合か。」

ツッコミムードが漂った。

その時、突然、ノリマキが飛んできた。

トウダイグサ・スカーレット大佐はノリマキを食べた。

「このノリマキは、新鮮だ。」

最強の味覚の持ち主なのかどうかは分からない。

まるでエリマキトカゲみたいにノリマキがトカゲの首のまわりを囲んでいる。

ケロロが保護をした。

「こんな生き物、見たこともないであります。」

「スニフルズ君に聞こうよ、彼なら知っているかも？」

カードを持った。フリッピーが砂漠に向かって歩いていた。

スニフルズは驚愕の言葉を吐いた。

「ビーボだよ。此の生き物、ビットワールドの生き物だ。」

ポップが聞いた。

「子の生き物の名前って何？」

「ノリマキトカゲだよ。」

ボーボボだけでなく天の助も目玉が、？マークになっていた。

第三話 謎の生き物（後書き）

ギャグが登場している。お話だったので、シリアスが少し邪魔だと思いました。次回は次の目的地に行く途中、トラブル発生します。

第四話 ビーボ見つけ（前書き）

シリアスらしさが欠けてしまうかも・・・今日はスペシャルです。
スぺの名前は後ほど

第四話　ビーボ見つけ

開拓用道具が少し減っていたが、気にしなかった。

「大佐殿、ビーボの容体は？」

「結構元気だ。しかも俺のためにノリマキを六つもくれたよ。」

みんなは頭を悩ませていた。

なぜ、ビッワールドの生命体がハッピーツリーワールドにいるんだ。

その間、新しいビーボを探していたのは、アイアイとゴンゴンだった。

どうやら気にかけているらしい。

「ゴンゴン、もしかしたらジャッキーホールがこっちに向いたんじゃないかな？」

「向くわけないだろ、リアルワールドでも、目撃情報が絶え間なく続いているから。」

ジャッキーホールとはビットワールドの海賊の一つでビット人の族、ジャーク族の伝説の神ジャッキーの怒りの力が原因で、ビットワールドに無数の穴が、開いてしまった。その結果、ビットワールドとリアルワールドは、結ばれてしまったのである。

ブディストモンキーは突然、モニターの右下を差した。

「ここ、僕が、修行場として扱っていた滝があるところだ。」

アイアイとゴンゴンはびっくりした。

アイアイはみんなを呼びたして、ビーボ捕獲班を作った。

少し荒い感じなチームとなった。

チームを紹介

カドルス

ヤンヤン

フリッピー

アングルⅡ 水素

うちはドルレイン

というチームになった。まともが全員そろっているので、チームワークも取れやすい。

しかし、ビーボセンサーからいきなりそのビーボが消えてしまった。

何があったのかは、わからないが、もしかしたら。フリッピーが少しだけ言っていた、何かを。

フリッピーは謎のカードを謎の扉にスラッシュした。

「クエー」

「何だこれ？」

セキエイインコは、どこかへ行ってしまった。

「ワシのペリーが」

ボタン、

扉が閉まった。フリッピーはカードを何度も何度もスラッシュしたが扉は開かなかった。フリッピーはこのカードの正体がわかった。

「そうかこのカード一回きりか」

フリッピーは「もしかして」思ったが手遅れだった。

第四話 ビーボ見つけ（後書き）

今回は、謎の組織が少しずつ動き始めた彷徨う元闇世界でスペシャルです。長過ぎだ。

第五話 ハッピーツリーワールドに潜む闇の影（前書き）

スペシャル最後です。二本立ては今後も続きます。

第五話 ハッピーツリーワールドに潜む闇の影

蒼い夜がやってきた。

スニフルツズは何か探し続けていた。

「おかしい、なんであんなところにビーボが、集まっているのだろうか???」

銀時はスニフルツズが、気にしていることを一緒に見ていた。

「なあ、眼鏡あり喰い。」

「スニフルツズです。いい加減名前を覚えてください。銀時さん」

「気になっていたが、ビーボって何だ？」

「ビーボって言うのは、BIVOという意味で、ビットワールド生命体ということですよ。しっかり覚えてね。」

「はい」

なんだかスニフルズが教師で、銀時が生徒みたいな感じになった。

フレイキーが少し怒った顔をしていた。

「静かにして下さいですう。眠れないでしょ。」

銀時とスニフルズは少し黙った。

フレイキーは臆病で優しい赤いヤマアラシの女の子だが、怒ると怖い子である。

スニフルツズはそろそろ寝ようかなと思い、全体の電気を消そうとしたが、

フレイキーがあることをしていた。

「やっぱりこの本、フリッピーさんが読んでみてよって言った本ですう。」

銀時は寝に行った。

サイエレンスは何かを気にしていた。

「あそこにいる、黒竦めの奴らは、何を企んでいるんだ。」

フレイキーは寝たあと、スニフルツズも安心して寝に行った。

うちはドルレインは光の闇九人衆を集めた。

光の闇九人衆とは、アンチヒーローのことで、悪が悪を滅ぼすみたいな感じになっている集団のことである。

O V E R

ハレクラニ

うちはドルレイン

トウダイグサ・スカーレット大佐

アングルⅡ水素

シャドーコンボイ

マグナトロン

ラドン・???????

ペイン

の九名だ。

中身は分からないが、凄い話し合いになっているようだ。

やがて深紅の太陽が現れようとしていた。

第五話 ハッピーツリーワールドに潜む闇の影（後書き）

スペシャルどうでしたか？すごくいいと思いました？感想をお願いします。

次回再び、電気屋さんへ行ったとき、ナルトと水素の前に出くわしたのはいったい？

です。

この次のスペシャルは嵐呼ぶ殺戮は清き桜の花を穢して情性に降りつもりて闇へと剣は舞うスペシャルです。長杉です。

第六話 謎の人物との遭遇（前書き）

シリアス度が一気に増えています。今回のお話は・・・感想よろしくお願いします。

第六話 謎の人物との遭遇

フリッピーはイライラしていた。

「ロンワン、いい加減、僕を帰らせてくれ、みんなが心配しているから。」

ロンワンはdon・tという顔をした。

再び電気屋さんに来た。どうやら気にかけていたことがあった。

ナルトとアンゴルⅡ水素のペアで電気屋さんを探索し始めた。

ビーボを探すこと三十分

「見つからない、ビーボセンサーは、このあたりだ。と言っているのに。」

「もう少し、探したらどうだってばよ。」

「そうだな。」

もう少し探すことにした。

更に一時間経過

やっと見つけた。

「水素、急いでビーボを捕獲するってばよ。」

「わかっている。」

しかし、謎の曲が入った。

ビーボは、音の方へと動き始めた。

「ビーボセンサーが、注意急いで電源を消して下さいセンサーが壊れる恐れあり。」

ビーボセンサーの電源をoffにした。

謎の人物たちが、ビーボを連れ攫ってしまった。

急いで捕まえに行く、ナルトと水素。

しかし謎の人物たちは足が、速かった末か、何処へ行ったか分からなくなった。

「くそっ、逃げられだつてばよ。」

「ん、何だこれ？」

「水素、何を見つけたつてばよ？」

「カードみたいな何かが。」

「あのビーボ名、ジャガー芋って言うなまえのビーボだって。」

ナルトは確かにじやがいもとジャガーが重なり合った生き物だなつと素直に自らうなづいた。

「行方不明になった。フリッピーの関係はあるのか？調べてくれないか」

「その前に、拙者がさっき、こんなカードを見つけたのだが、いったいどういうカードかを調べてくれないか。」

スニフルツはその場所を特定することに成功した。

「場所は、ハッピーエリアぬるぽガッだね。しかもそこに何やら怪しい、建築物があるよ。」

みんなは少しずつ謎が解けていたの様に感じていたのだが、実はそこではなかった。

「カードのことだけど、どうやら、一回使用したら、ゴミになるという、カードだったんだ。しかも謎のアルファベットHOVという言葉が、書かれているんだ。」

クルルが突然、訪ねてきた。

「スニフルツズよー、そのカードを俺にくれないかなあ、頼むよ。」

クルルがこんなにおねだりするとは、陰険さが欠けていたのか？

「しかも、これを見て、どこかの監視カメラがHOVのアジト裏口で確認された映像何だけど。」

「何やら、白い粉を持っているぞ・・・」

「クラッシャーだ。」

スプレンドイドが口を滑らせるかのように言った。

カドルスは何か、嫌な予感がしていた。

サイエレンスとセルインジーはこんな深刻な時に、楽しく、将棋をしていた。

「よくできるね。こんな状態なのに馬鹿どもが。」

銀時に邪魔された。

二人はプルコギを踊り始めた。

ボーボボは飛びひざ蹴りをした。

「お前ら、真面目にやれー」

HOVアジト

ロンワンは企んだ顔で、催眠粉を捲いた。

フリッピーは、その粉を吸って寝てしまった。

カドルスはだんだん危険な香りがしていることに気づいていた。

第六話 謎の人物との遭遇（後書き）

ギャグが少なくてすみませんorz

次回に關してもちよつとこんな感じになるかもしれませんのでギャグはしばらく休憩になります。

第七話

今やるべきこと（前書き）

展開がここで一気に変わります。感想よろしくお願いします。

第七話　　今やるべきこと

四体のビーボを戻す班と一体何が起こったかを確認する班に分かれた。

最初に戻す班は石モグラをビットワールドに戻す班だ。

セルインジー・キリスト

天の助

トウダイグサ・スカーレット大佐

という構成だったのだが、

三人ともはじけリストであるため、仲間割れしやすい。

「天の助、貴様の体からニンニクの臭いがするぞ。」

「えーしてないでしょ。」

「してるよ。こいつ賞味期限切れだからか？」

「吸血鬼真拳超奥義禁忌おふざけは許さない。」

「お前はギョラ公かー」

「違うな、なぜなら俺は、吸血鬼だから。」

「何、言わせるんだー。」

「自分で言ったくせにー」

しかも石モグラは連れ去られこの班は、失敗。

月ダンをビットワールドに戻す班は

カドルス

コニシキソウ三等兵

首領パッチ

の三人だった。

これは、確認ミスや、首領パッチが、奇妙なもの見つけていたせいで、月ダンが攫われてこの班も、失敗した。

「九尾真拳奥義魔献歌」

「台風のように舞い台風の如く刺す」

「二人一斉に攻撃して組んなーゴフッ」

ブックバードをビットワールドに戻す班は

サイエレンス

字

インクルリッシュ

の三人、百年前のはじけ組の一部だ。

扉まで近づいたのだが、カードも盗まれてしまったらしく、ブックバードもいないためこの班の救出作戦も失敗に終わった。

最後は、火山モスをビットワールドに戻す班は

フレイキー

うちはドルレイン

ボーボボ

の三人は、トリオネーションがよくて、頼もしかった。ボーボボの
まじめな行動もあり、見事、火山モスをビットワールドに戻すこと
ができた。

天の助と首領パッチは苛立ちをボーボボにぶつけた。

「ボーボボ、お前、まともな班に行きやがって。」

「御前等、外に出ろ。」

何が起こる事やら。

「君たち、真面目にやれー」

「ギヤーすみませんでしたー。」

はいっこれもパターンです。

H O V 基地では扉が開かれていた。

ロンワンはあるビーボに話しかけた。

「君が、あのビーボか・・・面白い良い人質が手に入ったぞ。しかもレアだ。」

バグバグ大王六世様も喜ぶに違いない。」

突然、モニターが映った。

「ロンワン、ハッピーツリーワールドの動きはどうだ。」

「ミロロギか、全く懲りずに動いている者が大勢いましてね。どうしてよいのか。」

「あとは、がんばってくれたま健闘を祈る。」

「わかりました。」

恐怖の時間の幕が上がろうとしていた。

第七話

今やるべきこと（後書き）

次回予告彼らの行動がついに明らかになる。

思いつ切って作り直ししまった。－太郎のソフトで書いた小説の読みづらさが改善したかと思えます。あと、アドバイス系の批評や酷評も受け付けてます。

第八話

HOVの罫（前書き）

更なる新展開、HOVに触れはじめます。感想をよろしくお願いします。

第八話

HOVの罠

フリッピーが行方不明になってから早三週間がとうとしていた。

フレイキーはフリッピーを待つことができず、ただ、ツンデレの最頂点に達してしまったためか、涙を流していた。

「フレイキー、心配しないで、フリッピーさんは、元気よきつと。」

ペチュニアのなぐさめの言葉も虚しくフレイキーに届いていない。

モールは、真実を話した。

「実は、私、HOVのスパイのスパイをしていたんですよ。」

どういうことかは、よく分からない。

詳しいことはシフティとナルトと土方が質問しに行った。取り調べ
室らしきところで。

HOVアジト

「あーつかれた。」

「御苦労だ。ユニコーグ。」

「フリッピーよ、いい加減に言ったらどうだ。貴様は、退役軍人の
割に、結構強いってか？ばかなことを言っなよ、ロンワン殿の方が
強いんだからな。」

ハッピーテンションズハウス

フレイキーは泣きやんだ。と思ったら眠っていた。

ギグルスが慰めたという。

「フレちゃんって寝相も可愛いわね。さすがハピツリのアイドルだ
けあってのことだね。」

首領パッチはフレイキーの寝相に惚れてしまった。

第八話

HOVの罫（後書き）

次回伝説のデュエルの前が訪れる。
ギャグがなかったな。シリアスが多い。
次回もこんな感じです。

第九話 モールすべてを話した時に起こる伝説のデュエル（前書き）

それでは、始めマース。感想よろしくおながいします。

第九話 モールすべてを話した時に起こる伝説のデュエル

「おい、盲目何か話せやゴルア」

シフティは、怒りがうるさかった。

ボーボボがわきちヨップしたあと、シフティは、眠ってしまった。

モールはとんでもないことを言い始めた。

「HOVは、happy organic violenceの略なんです。」

私は、彼らの行動を、見ていたんです。

ビーボの存在に気づいたのは、彼らが、半年前なんです。

彼等はビットワールドの技術を悪用して、あのカードを作った。

そして扉の正体は擬似ジャッキーホールを作り出すのです。

その結果、さらには、いろんなものを扱い、そのためか、災いを呼ぶはめに。」

突然、サイレンが鳴り始めた。

ビーボファイトを要求された。謎の人物たち。

「援護をしよう。」

「誰に？」

「彼らにだよ。」

フリッピーはビーボファイトするには条件として三つを用意した。

一つ目、×2ルールの導入

二つ目、人質を二人だけ出す。

三つ目、闘いに勝利すること

という条件だった。

戦いの前の静けさが、一時間続いた。

トーヤが円陣を出現させて、ビーボを呼び出した。

「本気のようなね、ジャーこっちも、とっておきビーボを。」

第九話 モールすべてを話した時に起こる伝説のデュエル（後書き）

ビーボファイトが登場。

その次がついに登場

嵐呼ぶ殺戮は清き桜の花を穢して情性に降り積もりて闇へと剣は舞うスペシャルです。感想よろしく

緊急企画ビーボファイト！敵も味方も大混戦（前書き）

ビーボファイトが開幕。感想よろしくお願いします。

緊急企画ビーボファイト！敵も味方も大混戦

ビーボファイトのルールを紹介しよう

天地水のビーボで闘う

天は地に勝ち

地は水に勝ち

水は天に勝つ

ただしカウンターを使うと1・5倍で反撃できる。

よけるは一試合に一回のみしかできない貴重なシステム運良ければ相手の攻撃がよけられる。

スペシャルルールで×2というシステムだ。これも一試合に一回のみしか使えない。

それでは対戦するビーボを紹介しよう。

まずは、カドルスチームのビーボはこちら

天族 七星シニガミ 攻撃力43 体力18 運39

地族 電柱キリン 攻撃力60 体力5 運35

水族 水たまん 攻撃力12 体力33 運55

となっている。

しかし敵側のビーボはこちら

天族 ふももんX 攻撃力108 体力3 運189

地族 石モグラX 攻撃力177 体力66 運57

水族 QカップX 攻撃力162 体力72 運66

戦いが始まった。

ラウンドone第一ターンの結果は天対天

カドルスチーム459 - 363

敵側のチーム932 - 897

ラウンドone第二ターンの結果は地対地

カドルスチーム363 - 291

敵側のチーム897 - 802

ラウンドone第三ターンの結果は水対水

カドルスチームはカウンターを押していたので291 - 198

敵側のチーム802 - 783

ラウンドtwo第一ターンの結果は天対地

カドルスチームは変わらなかった。

敵側のチームは783 - 685

ラウンドtwo第二ターンの結果は水対天

敵側のチームは685 - 619

途中またと違う映像が出た。

「みずき、これを」

「えっ、あの」

フリッピーは逃げた。

ラウンドtwo第三ターン地対水

敵側のチームは619 - 490

ラウンドthree第一ターンの結果は地対水

敵側のチームは490 - 378

ラウンドthree第二ターンの結果は敵軍のカウンターがさく裂した。

結果は天対地

カドルスチームは198 - 53

敵軍のチームは378 - 263

ラウンドthree第三ターン水対天の結果そして×2をカドルスは使った。

敵軍のチームは263 - 137

ラウンドfour第一ターンの結果は天対地

敵軍のチームは137 - 60

ラウンドfour第二ターンの結果は地対水

敵軍は避けるを押したが避けるは、失敗に終わった。

60 - 0になり敵は負けた。

「これで負けたとは思ってないさ。」

と言って逃げてしまった。

モールはキャップを見た。クラッシャー水溶液らしい。

いったい何が始まるのか？

トウダイグサ・スカーレット大佐はH O Vを再び警戒し始めた。

緊急企画ピーボファイト！敵も味方も大混戦（後書き）

次回は嵐呼ぶ殺戮は清き桜の花を穢して情性に降り積もりて闇へと
剣は舞うスペシャルです。さーて感想をよろしくお願いします。

第十話 ウラオモテヤマネコを探せ（前書き）

嵐呼ぶ殺戮は清き桜の花を穢して情性に降り積もりて闇へと剣は舞うスペシャルが開幕しました。感想よろしくお願いします。

第十話 ウラオモテヤマネコを探せ

フリッピーの次はモールがいなくなった。

ウラオモテヤマネコを探していた。

「大佐殿、そこにはいませんでしたか？」

「いなかったけど」

「顔に葉っぱを乗せて何やっているんですかー」

「何って、仮面だよ仮面。」

「大佐殿は、少し真面目にして下さったらどうですか。」

「相変わらず厳しいね、弟君は、ナットウダイ・スカーレット軍曹」

「わかりましたよ、トウダイグサ・スカーレット大佐殿。」

「たくつ、従姉と同じじゃん。」

少し口論になっていた。

その間にも、捕まえた。

ウラオモテヤマネコを捕獲成功。

しかし何やら怪しい影が映っていた。

「ハッピーツリーワールドに到着だゾ」

HOVアジトの中

モールはフリッピーに色々、質問をした。

「愉しかったですか？」

「わかんね。」

しかし影は見ていた。

「スパイされていたのか、今度スパイになっていたならば、刹那してやる。」

激しい殺意が何を動かすのだろうか？

第十話 ウラオモテヤマネコを探せ（後書き）

スペシャルの一話目が終わりました。感想よろしくお願いします。

第十一話 お帰りフリッパー（前書き）

第二話目です。感想よろピク

第十一話 お帰りフリッピー

フリッピーが来たのを知ったフレイキーは、フリッピーに抱きついた。

「お帰りなさいフリッピーさん、僕、心配していたんですう。」

フリッピーは笑顔の状態で謝った。

「ごめんな、フレちゃん、僕はね、HOVのことで気にしていたんだ。」

「フリッピーもフレイキーもラブラブだな、ショボーン」

ツンデレになっていたのはスプレندیッドだった。

みんなはあることを思い出した。

モールが言ったことで何か、聞き忘れないかと。

そんなことよりもフリッピーが久しぶりに帰ってきたのでみんなが歓迎をしていた。

アングル「水素とラドンとラッセルはHOVのことを話していた。

「拙者は、どうしても気になることがあるのだが、HOVってビィボ集めをしているんなら何か怪しいかもしれないな。」

「ビィボは出来るだけこっちで集めるしか。」

「ウラオモテヤマネコは保護していますしー」

happyエアメロンパンの美味しさ舐めんな

「原始凍結真拳超奥義。ピーソ・ファンディング」

「楽勝過ぎだな、貴様の技は、消えてしまえ命の火よ。」

「ぐわぁーーーーー」

地面に飛び散った紅い液体、クロ・マーモットの死体があった。

「抵抗するからだ、バーカ」

トウダイグサ・スカーレット大佐はケロロ小隊とフリッピーとトウダイグサ科を呼んだ。

何が始めるのだろうか？

第十一話 お帰りフリッパー（後書き）

第二話目終了、さて感想よろしくお願いします。

トウダイグサ科とはこの小説の設定では、軍ということになっています。

第十二話

もめ事（前書き）

スペシャル第三話目です。感想よろしく。今回のお話には残酷なシーンが含まれていますのでご注意ください。

第十二話

もめ事

「面白いことって？」

「本当は、やりたくないのだが、へりを撃墜させようかな。ほらあそこに」

HOVと書かれた。第七軍とも書かれていた。

「タカトウダイ中佐、バズーカを持ってきてくれ。」

「了解しました。」

バズーカを持ってきた。

「小さいなあ、それでも、撃てるのか。」

ギロロが疑問を抱いた。

「見れば分るさ。発射」

ドゴン

凄く弩きつい音が出た。

ヘリコプターは、撃墜された。

HOV第七軍が一気に攻めてきた。

ヘリコプターは、無人飛行つまり罠であったのだ。

戦いが始まった。

しばらくしてH.O.V第七軍から多数の死者が出た。

部下たちの血を舐めていたのはトウダイグサ・スカーレット大佐だった。

「君たちの血は、争いの味に染まってとても甘いね。おかわり」

どす黒い声が、トウダイグサ・スカーレット大佐の本性である。

フリッピーとコニシソウ三等兵は覚醒状態となり戦いを屍に変えていた。

戦いに死と血はつきものと言っているのはテリハニシキソウ一匹狼兵だ。

第十二話

もめ事（後書き）

スペシャルも終了しました。
感想よろしくねー

第十三話

歪んだ平和主義者の戦いの終わらせ方（前書き）

今回も残酷描写がありますのでご注意ください。

感想お願いいたします。

第十三話

歪んだ平和主義者の戦いの終わらせ方

テリハニシキソウ一匹狼兵は謎の多い兵士である。

大佐の命令通りには、動かず。一匹狼で平和へのルートを探りに探っていたという。

トウダイグサ・スカーレット大佐はこう言い放った。

「よし、みんな離れてくれ。」

もつと闘いたい気持ちがあるが、トウダイグサ・スカーレット大佐が言っと、トウダイグサ科とケロロ小隊は退散した。

テリハニシキソウ一匹狼兵は覚醒フリッピーを抱いて戦場から離れた。

「てめー離せ。」

「大佐殿は、あの技を使ったがっているのだ。戦場から離れるしか方法がない。」

「どんな技でござるか？」

ドロロが問った。

「大佐殿の技でフランドール・スカーレットと似ている技名がある。スペルカードだがな。大佐殿はそのスペルカードを146種類持っている。残酷だが、平和に関する。っと大佐殿本人がいつていたから。」

「その技名は、言った何だ？」

土方が問いかけた。

テリハニシキソウ一匹狼兵は青ざめた顔で言った。

「平和　そして誰もいなくなる？という技です。」

ケロロは一瞬、背筋が凍った。

そう、技が発動前は、誰もが、怖いという技である。

デイダラも怖さの余り、トビを呼び出したがねトビは怖さの余り、土の中で怖がっていた。

「貴様、何がしたいんだ。うん」

「だって先輩、怖いんだからしょうがないでしょうが。」

「だったら先輩も、どうです。」

「これはいいな。うん」

「何してるんですかーお二人はー」

トウダイグサ・スカーレット大佐がカードを取り、こう言い放った。

「平和　　そして誰もいなくなる？」

威力がケタはずれだ。

戦場があつた場所はでっかいクレーターが開いていた。

「怖いであります。大佐殿の技が。」

ケロロは青ざめた。

トウダイグサ・スカーレット大佐はユニコーンを見つけた。

「やばい見つかった。」

「氏ね、お猿の*****が。」

「それって小説禁止用語じゃねーのか？」

「大丈夫です。著者が変換ミスしているんで。」

「そんなところやないでしょー」

ギグルスの突っ込みもあってか戦いは終止符をうった。

銀時が言った。

「トウダイグサ・スカーレットよ、下ネタを使うのは、銀魂だけって言ってなかった？」

「悪い、つい本気になって。」

馬鹿にもほどがあるというのはこのことだ。

H O V ア ジ ト

「ユニコーグが死んだのか。そろそろ第六軍を出そうかな？」

たくらみが厄介さを増さそうとしていた。

ハッピーテンションズハウスの浴室

「フリッピーさん、背中洗ってあげましょうか？」

フレイキーは原型の姿をしていた。でなかったらまずい。

フリッピーも原型だった。大変なことになる。

「えっ・・・いや・・・あの・・・」

フリッピーが顔が赤くなった。

「どうしたんですう。フリッピーさん」

「何でもないよ」

スプレنديドが覗き見をしていた。

第十三話

歪んだ平和主義者の戦いの終わらせ方（後書き）

少し謝らせていいですか？この小説第二章に突入したら、いきなり下ネタが出る恐れがあるんですよ。その時はその時で修正いたします。次回をよろしく。感想よろしくねー

第十四話 謎の生き物を見ていたHOV（前書き）

感想よろしくと重大発表が詳しくは後書きで

第十四話 謎の生き物を見ていたHOV

不思議なことが一つだけあった。

バグバグ大王六世の特質だ。

スニフルツズはあることに気づいた。

「何だこれは、バグバグ大王六世の作った。組織図が分かった。」

トウダイグサ・スカーレット大佐はその一部を見て、イライラしていた。

「まだ生きていたのか、あいつめー」

何のことかはわからないが、大変だった。

H O V は、謎の生物を眠桶カプセルの中に閉じ込めていた。

「クロウーよ、凄いだろ。」

「凄いですね。ロンワン様」

「バグハグ大王六世様からまさか眠桶カプセルをもらえるとは、しかも二つだ。」

「大変です。ロンワン様」

「どうした、セックスセリウム」

「不審な者達を捕まえてまいりました。」

「でかしたぞ、セックスセリウム。」

「有難う御座います。」

「五歳児の男子女子を一人ずつ捕まえたのか、これで新しい人質ができたぞ。」

ハッピーテンションズハウス

タグラがバグハグ大王六世の能力を調べていた。

「何だって、バグハグ大王六世の能力は、誰もが知らないってどういうことだこれは？」

「六世様の秘密を見たな、償ってもらいますよ地獄で。」

「なっ、三途」

「久しぶりですねー闇影様」

因縁が見えている。

第十四話 謎の生き物を見ていたHOV（後書き）

重大発表

劇場小説版ハッピーツリーワールド夜明けが明ける頃になが、ついに短編として登場します。少し書きかえられていますので、その点も要チェック

感想よろしくお願いします。

第十五話

因縁の戦いのさだか（前書き）

残酷描写あります。ご注意ください。感想よろしくね
新しいスペシャルが登場します。詳しくは後書きで

第十五話

因縁の戦いのさだか

「時空壁」

ドルレインは、時空で壁を作った。

「そんな壁作ったところで、何になる。死んでもらうぜ闇影、忍法闇死血舞」

三途は、知る由もなかったドルレインは既に、幻術をかけていたことを。

「何っ、はめるつもりがはめられた。」

「俺は、貴様に知られたくない情報を早めに消すのだったと悔やんでいてね。」

闇隠れの里という謎の多い里。闇の心を持つ者たちが集う場所として恐れられている。四代目闇影うちはドルレインは、その闇隠れの里に革命を起こした。三途は、三代目闇影の下にいた秘書。彼は、闇隠れの里がなぜできたかの情報を知っていたため。ドルレインの秘書にはならなかったことと、もうひとつ、かつてのうちはドルレインが、暁という組織にいたことだ。三代目闇影は人柱力で六尾を体内に取り込んでいた。制御が可能なためか、六尾の恐怖を闇隠れ暁三人衆に襲いかかった。うちはドルレイン、うちはタグラ、水銀ザクロの三人は、自らの知恵で、六尾を捕獲した。しばらく時は経過して、四代目闇影うちはドルレインとなった時、三途が闇隠れの里の秘密がぎつしり入ったデータバンクを破壊し、うちはドルレインに見せなかった。三途の右頬に深い傷を負わしたドルレインは、さつさと去れ、愚者がと言って、三途を闇隠れの里から追放した。

「恨みてえのは、こつちのセリフだー」

「幻術東煉釈」

三途は苦しみの顔をあらわにしていた。

ドルレインは、疲れていた。

「しめた、忍法鈍兔」

水銀ザクロが体から金属を出して

「金属術偽露鎮」

三途はどつやらザクロの攻撃を見破っているようだ。

「貴様は、俺が上忍の時、知っているんでね。」

「何だと。」

「貴様の血継限界は、もはや読み済み何だよ。」

「金属術死神鎌光臨」

「楽勝過ぎだー。」

三途は、フレイキーを連れ出して人質にした。

「手を、離して下さい。」

フレイキーは嫌がっていた。

フリッピーは覚醒状態となっていた。

「フレちゃんを離せ、糞野郎が。」

三途はあほボケた顔をしていた。

「いい声だ。録音機で何度も聞きたいね。」

フリッピー覚醒モードは紅蓮と組み、三途に攻撃を開始した。

「晶遁・結晶銀桜」

三途の左腕を、結晶化させた。

フレイキーは逃げた。

覚醒モードのフリッピーの攻撃が三途の左腕に当り、三途の左腕は、砕け散った。

左腕がないところから紅い液体が少しだが、微妙に出ている。

フリッピーの蹴りが入り、三途は、飛ばされた。

クロウーが現れた。

第十五話

因縁の戦いのさだか（後書き）

さて次回は、スペシャルです。

スペシャルの名前は、激闘現れたHOVのリーダーの影スペシャルです。お楽しみに
感想よろしくね

第十六話 苦しみ（前書き）

スペシャルスタート。

感想よろしくね

残酷描写があります。ご注意ください。

第十六話

苦しみ

クロウーは、こう言い放った。

「三途、貴様、勝手な行動を取るなどあればと言ったのに。もういい貴様は死ね」

「ギャー」

クロウーの手に付けたナイフが、三途の体を引き裂いた。

飛び散る血が、酷い証拠となっていた。

「あいつ、手にナイフを十本つけているよ。」

カドルスが言ったのは、クロウの手だ。

「行け、我がよろしたちよ。」

「黙示録撃斬」

「うちは一族流かまいたち」

なぜか、銀時も参加した。

「って俺、いつの間に？」

「いいなあー俺も加わりたかったなー」

水月も参加する気満々だったが、

サスケに止められていた。

クロウーは、五体をバラバラにされていた。

テリハニシキソウのナイフの速さがケタはずれなためか、容易に斬りやすかった。

「だめじゃないか、僕の親友を傷つけじゃ」

リーダーがとうとう現れた。

第十六話 苦しみ（後書き）

スペシャル一回目終了です。感想よろしくねーこあーら

第十七話 ロンワン襲来（前書き）

スペシャル第二回です。ちなみにスペシャルはここまでです。
感想お願いします。

第十七話 ロンワン襲来

ロンワンが現れてしまった。

戦いになるのか？

トウダイグサ・スカーレット大佐は、思いっきりおふざけをした。

「ショート・ポンジンサン」

ロンワンの攻撃がギグルスに襲いかかった。

「キリスト真拳奥義クライム・リング」

ロンワンは、くだらない顔をしていた。

真の戦いは始まろうとしていた。

「貴様等は、俺が人質を用意していることをな。」

見えていなかったところから、唐突に檻が現れた。

「外道は、潰す。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は怒りに満ち溢れていた。

第十七話 ロンワン襲来（後書き）

スペシャル終了です。

劇場小説版をお楽しみにして下さい。次回の展開も見逃さないでください。

感想よろしく

第十八話

スパイ容疑（前書き）

とうとう、捕まった、予備人達^{ふくしゅえん}、はたしてどうなる。

第十八話

スパイ容疑

「この小娘はいい体だ破壊してもいいぐらいだ。」

その小娘っていうのはみずきであった。

「ライトマグナス。」

「ロンワンいい加減にしないかどれだけフリッピーを恨んでいるのかも分かった。」

「もはや、俺にあるのはフリッピーの恨みなど甘い今は四大世界だ。」

「ロンワンいいかお前罪のない人々を殺して得があるかないんだよ。そこにいるお譲ちゃんだって罪のない子だ生命を破壊することはジヤシン様もお怒りが来るぜ。」

「いい加減みんなを解放しろそしたらお前との戦いは後回しにしても構わない。」

「不細工な発言にしかすぎんこいつ等を消したら次はお前らだ逃げることもできない抵抗しても無駄だ。」

「ふざけんなっ お前は俺だけを恨んでればいいものを何で四大世界を恨む気が狂ったんなら己自身を消せ。」

みずきは髪の毛をロンワンに引っ張られていた。

「痛い止めて。」

「やめる痛がつてるじゃないか。」

ロンワンの右手に持っているものは銃しかもマコトに向けている。

「言つとくがH O V組織は、ベルゼブモンを改良している我々の言うことを聴くようになつ。」

「そんなことさせません。」

「無駄だ。ベルゼブモンにお前の善の声が聞き届くと思うか。」

「ゲットどうやら皆がくるみたいだ。」

「わざわざありがとうございます総司令官。」

「もう少し早くできないのぉータカティン。」

「てゐごめんなこれ以上スピードが出ないんだよ。」

「トーヤ無事でいてくれ。」

「シャビシャビ」

トーヤは自分が考えたビーボシャビをほかの人よりも愛しゾンビーボの状態でも裏切らなかった。

そして今はこんな現状。

「トーヤ落ち込んだら駄目だゾ。シャビが大変なのはわかるけど・・

・
・
・
「

「マコト・・・・・・・・・・」

ロンワンはとんでもない行動に遂に出てしまった。

第十八話

スパイ容疑（後書き）

かなりビビった人いたら、凄いと思ってください。この二次創作小説ですが、スケールがかすぎるんです。いろんな意味で。次回に期待が高まります。感想よろしく

第十九話

シナリオ（前書き）

ちよつと残酷なシーンがあります。感想よろしくねー

第十九話 シナリオ

みずきは叫んだ。

「マコトーーーー」

ロンワンはマコトの左腕に銃で撃った。

「クッ」

ロンワンは気が狂ったかのように笑った。

「お前を倒す吸血鬼真拳超奥義植物拘束真実。」

「てめえ死ね。」

「ってなんで俺になるのー」

「だって天の助、貴様からニンニクのおいがするんじゃない、禁忌おふざけは許さない。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は「言っとくが俺は525年も生きてるもんでねシカマルよりもいい頭を持っている俺に倒せると思っているのかね。」

「チッ」

「ならその頭のよさを試してもらおうじゃないか。」

「遅いな。」

ロンワンの背後にいるトウダイグサ大佐は脚をおもっいきり強く口ンワンに蹴りつけた。

戦いが終わるわけがない。

マコトは左腕を見ていた。

地面を見ると軽く落ちていく赤い液体を見とれてしまった。

みずきは冷静になれず目をこすってこれは何かのアクシデントだと言いきろうつとしていた。

「風遁螺旋手裏剣」

ロンワンに直撃したかのように思われたのだが

「へえー下らんな」

「うあ
」

ナルトは蹴られていた。

「まずいあれ以上やられたらナルト君に眠る者が起きてしまう。木遁勿点三」

ロンワンとナルトの距離をうまく遠ざけた。

ヤマトは大きいため息をついた。

「天の助を十字架^{ロザリオ}に縛り付けて、逝くぜ、キリスト真拳奥義ラ・ラ・ラ」

「この小説に天の助を加虐するキャラが二人もいますー」

ロンワンが本気で風間トオルに銃を向けて発砲しようとしたその時赤くてとてもでっかいロケット型飛行機みたいな物体が拉致されている仲間を救った。

闘いは、何かを呼ぶ。

第十九話

シナリオ（後書き）

次回、さらに仲間が登場します。こころご期待。

第二十話 異世界からの訪問者（前書き）

スペシャルではないのでご注意ください。いったいロンワンから逃れられる手はないのか？

第二十話 異世界からの訪問者

「あれはもしや。」

「ウトアだよねへへへへへへへへへへ。」

「ウトア！笑い声が気持ち悪いんだってばよ。」

「おいトウダイグサ大佐よこんでいインドカレー。」

「いったいどこから覚えてきたんだ。」

ロンワンは逃げてしまった。

「フリッピーさんロンワンが逃げていちゃったですう。」

「ロンワンって奴本当に許せない。」

「ほんとだよ全く。」

「そういえばモールさん？」

「私やフリッピーさんのいた警察のことが聞きたいのですねペチュニアさん。」

「はい。」

「では言います。私達はサイバー空間保安警察部隊と言いましてね。我々は特にサイバー空間のあらゆる犯罪組織を次々と逮捕していったんですがある組織がサイバー空間に七大魔王が作られてしまい我々は行動不可能になってしまったのです。しかもその組織がHOVと言う組織だったんです。しかもリーダー当時でミロロギが長だったんですがいつの間にかミロロギは七大魔王に入りそしてロンワンがリーダーになってしまったんです。」

それを聞いていた。

「それじゃすべての元凶は……HOV？」

「そうみたいです。こんな情報も得ました。」

サイバー空間保安警察部隊のテープだった。

中身を聞いてみると「我々H O Vは四大世界を征服し力を獲る。

サイバー空間の七大魔王を生み出して征服に一步近づこうとしたのだが七大魔王の一人が死に至り更にはもう一人はビットワールドを制圧できず我々は混乱を手に入れてしまった。

そんなときジャンとポールと言う者が更に連合型犯罪組織D G Dを作り我々も加盟した。

メカミ君を使って世界征服を目論んでいるらしく我々もメカミ君とやらを使用したいがどうやら充電するのにコストがどでかいそんな面倒な者は扱わないといい我々は殺の束を作ったそうゾンビーボ強化版だ。

我々には更にベルゼブモンと言うデジタルワールドの七大魔王の一人を作り変えている。

我々の八人目の魔王として扱う予定だ。

我々の活動は連合型犯罪組織DGDにも広く知られている我々を打倒しようと企む軍団がいるがそいつらが仮に我々を倒したらDGDが容赦しない即効的抹殺が来るだろう。」

皆は怒りの沈黙をしていた。

風間トオル「そうかHOVを倒しても犯罪組織の一つが減っただけしかも容赦なく殺しにくるって許せない。」

「そろそろHOVのリーダーの秘密教えてあげましょうか。」

フリッピーはHOVのことを語りだそうとしていた。

第二十話 異世界からの訪問者（後書き）

次回予告 第五軍が来た。そしてフリッピー達は・・・
感想よろしくお願いします。

第二十一話

戦争（あらそい）の真実（まこと）（前書き）

今回は闘いシーンなしですが悲劇の始まりが訪れる。

第二十一話

戦争（あらそい）の真実（まこと）

「実は僕あいつが危険すぎると思っていたんです。」

「どづいづいと。」

フリッピーの話はこうだ。

ロンワンはフリッピー小隊を引率する大佐と同じ班だった。

ケロロはふと思った。

「そっぴーやー吾輩の小隊の他にもいくつか引率されている軍隊がいたのですなあ。」

フリッピーはケロロに空手チョップし気絶させた。（どうやら話を逸らさないでということなんだろう。）

話を続けた。

マリルスとケリッパーと言う本来はフリッピー小隊の軍人だったかこの二人が何らかの原因で殺戮されていることに気づいた。

その時

「大佐ー死ねー。」

という声がした。

マウスカーブームが行こうとしたがフリッピーは彼の手首を持って

「今、いったら殺されちゃうよ。」と注意した。

大佐はこのロンワンを追放処刑する。

と言って、ハッピーツリーワールドの太平洋のど真ん中に二万メートルから落としたんです。

「ニッ、二万メートルだーそれでロンワンは。」

「僕もてつきりロンワンは死んだと思ったんだけど。僕が退役軍人になったとき気づいたんだ。あいつは、生きている可能性があるってね。」

「僕、フリッピーさんの言っている真実は嘘ではないですう。だって

てフリッピーさんの裏の人格が時々教えてくれたんです。ロンワン
と言う危険な軍人が来たら俺はこの愉快でカッコイイくて可愛い
仲間達を護るっと言いきっていたんです。」

「これも真実^{まこと}で僕の裏はフレちゃんのガードマンになったというこ
となんです。」

「ま、まずいよーみんなまたHOVの軍団が来たよー。」

「今の我々は敵に囲まれているようなものだこのことを四面楚歌っ
ていう人間という種族が教えてくれた言葉だ。」

植物技術で対抗する。

相手がビットワールド技術を悪用しているのなら。

という覚悟を皆は決めた。

果たして本当にこの戦争に終結があるのか。

第二十一話

戦争（あらそい）の真実（まこと）（後書き）

次回は、あのパントが・・・誰だかわかりますよね。次回をお楽しみに

感想お願いします。

第二十二話

フレイキーが泣いている（前書き）

今回はスペシャルです。暁九つ闇夜に隠れスペシャルです。
三本立てなのでよろしく

第二十二話

フレイキーが泣いている

戦いはシンプルすぎるほどスムーズに済んでいった。

「タカトウダイ中佐逝くぞ最大級の技を。」

「了解大佐殿。」

「植物天征・火の鳥」

多数の敵たちが燃え盛った。

それを見たフリッピーが

「よし喰らえ火薬ばら撒き。」

大爆発フリッピーはちょっと物足りなさそうな顔をしていた。

「ナルトよりも僕の方がすごいよーだ。風遁台風螺旋丸。」

「威力が違うのは修行の回数だろお前絶対何回修行をしたんだってばよ。」

そついう風に言ったナルトだがカドルスは無視した。

戦いは終わった。

みんなは疲れてはいなかった。

マイムは倒れていたしかも無数の糸針。

「気をつけるボスは下にいる。」

「仏教の眼開眼」

しかし敵はどこにも見当たらない。

「気をつける未知なる敵はどこにいるかをブディストモンキーどうだ敵は見つかったか。」

「こんな敵あり得ない。シバティカングだ。」

フレイキーは涙を流していた。

「マームがマームが。」

マイムは四方八方に糸針がマイムの体を貫かせていた。

「フリッピーさん気を付けてよ。」

フレイキーに襲いかかろうとした敵は

「チッ、この俺様セックスセリウムがまさかのミスをするとは。」

「赤化の花の舞。」

フレイキーが守られた。

ポインセチアがバリアを作ってくれた。

「太陽みたいにニッコリしなさいフレイキーちゃん。」

フリッピーのナイフ飛ばしがセックスセリアムに命中した。

セックスセリアムは死亡した。

マイムだけでは無かった。

クロ・マーモットも血まみれになっていた。

「残念だけど二人とも心臓まで切り裂かれていたり貫通していたりと酷い状況助けることは不可能です。葬送合掌。」

助けられなかった責任は誰でもない守りたかったみんなのせいでもあるからである。

墓は建ててあった。

「クソっどうして守り切れなかったんだ。」

トウーシーは目に涙がにじみ出していた。

「教訓その九百参拾壹死んだ仲間には悲しき顔でお見送りすべしっていうことだな。テリハニシキソウ。」

「ああ、その通りだ大佐殿。」

皆は気づいてはいなかった戦場に残っている一枚の紙これが何を示しているのか定かでは無かった。

第二十二話

フレイキーが泣いている（後書き）

第一話目終了、next Go

第二十三話 謎の暗号（前書き）

第二話目です。どうなるのかこのあと

第二十三話 謎の暗号

死んだ二人の笑顔が記憶をよみがえらせた。

パントマイムの意味がはつきりしていなかったため後悔した時、いつもアイスクリームを届けてくれる優しい原始人。

しかしこの二人の死は二度と復活ができなくなったなぜならHOVやバグハグ大王六世がいるからだ。

あいつ等を消せば全てが良くなると信じたいから。

むやみに、死に送れるものか。

「みんなこんな紙を見つけたんだスニフルズ見てよ。」

「読む前に注意鏡を使つべからず以上。」

「せりせりせりたちつつつヒント余分な文字を抜き去れ。」

「分かるわけないよ。」

「鏡？」

「余分な文字が多いよ。」

これはみずきもマコトも頭を悩ませた。

暗号はあることを示していると思うのだが

ナツティがすごいことを言わない限りみんなは解けることはなかった。

「ふたつの文字を消せばいいんだよ。」

皆はなるほどと納得した。

このまま読むとニヨロモ「せりたちっ？」余計に分からない。

今度はアイアイが「鏡に向けたらどうだ。」
「
」
つと
言
つ
た。

「
よ
し
っ
や
っ
て
み
よ
う
じ
ゃ
な
い
か。
」

第二十三話 謎の暗号（後書き）

暗号解読の結果は・・・

N
E
X
T

G
O

第二十四話

解読結果（前書き）

スペシャル最終です。感想お願いします。

第二十四話

解読結果

難しい暗号も何かすれば解読可能となる。

アイアイが暗号が書かれた紙をよく見ると薄い文字が浮き出ていた。

「鏡を使えば暗号文章が見れるよ。」

鏡にかざした瞬間

「巨大な怪物参上お前らを叩き殺す。」

「どういうこと。」

「そうかクラッシャーの謎の副作用だ。あれが原因で敵軍を巨大化できるんだ。つまり簡潔に言えばクラッシャーは一度ビーボに飲ましてゾンビーボ強化版にした後そのエネルギーを奪う。そしてその

エネルギーをH.O.V.が喰らうと巨大化と言つことになるのか。」

「それはまずいですね。」

「でも巨大化した敵をどう倒したらいいの?」

「オメガスプリームで対抗できる。」

しかし問題がある戦わせるのはいいのだが敵軍の細工だ。

あるヒーロー達がリアルワールドからハッピーツリーワールドに
こうとしていた。

「おいっ、風、調子はどうだ。」

「ああ、十分だぜー」

「余裕だな。」

第二十四話

解読結果（後書き）

次回は、typhoonマンズが登場します。お楽しみに

第二十五話 明らかになった途端（前書き）

この戦いでひぐらしが鳴いたスペシャル始動。四本立てなので
ご注目！！

第二十五話 明らかになった途端

巨大軍団が攻めてくる。

みんなは戦闘モードに入った。

しかしあまりにもでかすぎると倒せばいいんだ。

リーダーもでかいこれは第四軍だ。

「コニシキソウ三等兵どうにかならないのかよ。」

「無理やりバズーカをぶっ放すなんてできませんね。」

退役軍人と植物軍人を悩ませるほど強い

だが「喰らいなさいスプレンドイド私はとんでもなく横暴ですパンチ。」

フリッピーは苦笑していた。

「認めやがったな童貞ヒーローが。」

なぜかラッセルは戦いが嫌いなのかどこかへ行きやすいという。

それが彼を致命傷に至らしめた事件となることも知らず。

タイフーンマンズとは「雨」「風」「波」の三種の神器みたいなヒーローであるリアルワールドから犯罪者いないという真実を聞いたらしいその真相探りにハッピーツリーワールドにやってきた。

「g u y k i l l l a n c e G o」

彼等は黒い閃光の如く巨大な敵たちを困らせた。

カドルス達は「いったい何者？」黒い閃光を見続けた。

コンピューターの情報

キャラクターナンバー001
トウダイグサ・スカーレット大佐
ハッピーツリーワールドの主人公

種族 吸血鬼

能力 平和を作り出す程度有能力

性別 男

モットー 平和を穢したら殺す

テーマ曲 残酷的軍歌〜紅き平和觀望七条約

第二十五話 明らかになった途端（後書き）

小説内に新コーナーを設置しました。面白かったらご評価下さい。
まだまだ続きます。

第二十六話 タイフーンマンズ登場とtworkール達成（前書き）

本格的にスタート、新コーナーに期待してください。

第二十六話 タイフーンマンズ登場とtworkール達成

雨風波の三人タイフーンマンズだ。

「リアルワールドで活動してたんじゃないかなかったですかー？」

「実は連絡があってね巨大な敵軍を倒してくれっとまあ倒したらリアルワールドに行っちゃうけどな。」

タイフーンフォーメーションの準備は着々と済んでいった。

「タイフーンマンズが来た。よしっHOVの秘密を探るかクルルさん頼みますよ。」

「たくつこれだからビットワールドとリアルワールドの出身者は・
・まあいいだろ探るぜえクックッー」

「タイフーンフォーメーション。

雨「低気圧の鋼鉄」

波「カトリーナの惨劇」

風「竜巻殺戮迅速拷問刑」

敵軍はきれいに消えた。

「クルルさんやっぱりデジタルワールドから連れ出した生命体がい
ますね本部に。」

「ん、警告警告なんじゃこりゃ」

不吉なことにクルルの眼鏡が割れた。

トーヤは嫌な予感がしていたのでその場を去った。

「あーめーあーめーもっーとーふーれーとーナーリーのーヒートー
はーよーくーめがね返せ。ドロロはどこあいつはどこにもいねえぜ
えククークークククククックッー。」

ドロロは気が離れた。水色の体が真っ白になっていった。

トーヤはあることに気づいたフリッピーとフレイキーとモールが楽しそうに笑っている場所が危険だって言うことを。

コンピューター情報

キャラクターナンバー 002

タカトウダイ中佐

種族 火の鳥

能力 火や溶岩の温度を自由に操れる程度の能力

性別 男

モットー 平和の炎は消させない

テーマ曲 炎は平和の信仰を呼んでくれた

第二十六話 タイフーンマンズ登場とtworkール達成（後書き）

クルルの暴走ネタ。一度は作ってみたかったんですよ。
さて新コーナーのおかげでオリキャラの全てが分かります。

第二十七話

フリッピーとフレイキーとモールが閉じ込められた！（前書き）

今度の緊急企画は脱出ゲームです。新コーナーも期待

第二十七話 フリップーとフレイキーとモールが閉じ込められた！

厩気楼が突然発生した。

「おいヘタレ軍人君」

フリップーはムツとしたが何も見えない「この厩気楼霧みたいだ。」
突然黒い物体が現れてフリップーとフレイキーとモールを閉じ込めた。

「ここはどこなの。」

「おいからすると謎の部屋の様子ですね。」

「開かないこのドアどうしよう開かないよ。」

「皆さんフリッピーフリッピーさん達が閉じ込められてしまいました。」

「そんな馬鹿な」

みんなはそういう、その時、

コンピューターが「脱出プログラム起動中」

「これはまさか」

「まさかって何が？」

「脱出プログラムだよ。もうすぐゲームが始まる。」

コニシキソウ三等兵はこんなこと言い始めた。

「あの黒い物体、どうも頑丈だ。それに扉から出るには、ある方法が必要らしい、それは俺もわからないが、フリッピーとフレイキーさんとモールさん、無事にいてくれ。頼む、俺はそこへは行けない、テリハニシキソウ師匠のような透明になる能力は得ていない。」

「フリッピーとフレちゃんとモールさん大丈夫かな？」

「脱出ゲームが難しそう。」

ロンワン「ビンゴ」

コンピュータ情報

キャラクターナンバー003

テリハニシキソウ一匹狼兵

種族 ぬえ 鵜

能力 身体を透明化できる程度の能力

性別 男

モットー unknown plant

テーマ曲 unknown plant

第二十七話

フリッピーとフレイキーとモールが閉じ込められた！（後書き）

更に続きます。というより脱出ゲームらしさがあるかどうか微妙

緊急企画 閉じ込められたフリッピー達を救え！（前書き）

少し長いです。ご用心をとスペシャルラストです。

緊急企画 閉じ込められたフリップー達を救え！

「開かないですう。この扉。」

「畜生、窓が鉄格子になって出られない。」

「この匂いはトーヤと風間トオルの部屋の匂いだと思います。」

「なんでここまで来てこれをやらないとだめなの？」

「今、フリップー達が閉じ込められた部屋の構造は」

「なんだこれ難しい構造になっているじゃないか。」

「僕の部屋だ。」

フリッピーはカードらしきものを見つけた。

この部屋の仕組み通りならばもう一つのドアで出られるらしい。

フレイキーは謎の紙を手に入れた。

中身はこう書かれている。「HOVS」

カードキーに文字を打つ欄があったペンで書く仕組みらしいしかし、ペンがない。

モールはペンの部品と思われるものを発見。

「これはペンのキャップだね。」

フレイキーが部品を次々と発見していった。

「ラッセルさんとの通信がつながりません。」

「ラッセルラッセル応答してくれえ頼む。」

「なっラッセルが大変なことに」

「頼む脱出してくれ。」

「これってシャープペンシルだ。」

フリッピーがHOVSと入力したとき第二の扉が現れた。

それを空けようとした瞬間緊急事態発生そこらじゅうから針が出てきた。

「怖いよと涙を流したとたん紙にもう一つの文章が浮き出た。」

それはXAVIであつた。早速書いた。

針の動きは止まった。

モールが扉を開けたとたんみんなが待っていた。

二人を除いて。

コンピューター情報

キャラクターナンバー 004

セルインジー・キリスト

種族 妖怪鼠 神

能力 生物が生まれながらにして持つ罪を自由に操る程度の能力
性別 男

モットー 罪を裁けと言ってもそう簡単には裁けないのですこれイエスの極意也。

テーマ曲 罪操りし其の神 new christ god

緊急企画 閉じ込められたフリッピー達を救え！（後書き）

スペシャル終了。次回、フリッピーが涙をこぼす。
感想よろしくと後、評価もよろしくお願いします。

第二十八話

フリッピーの涙（前書き）

いきなり涙腺崩壊注意報発令です。

第二十八話

フリッピーの涙

「ラッセルさんは？」

「ラッセルさんは何者かに殺害されたんだ。」

ギロロによれば傷は相当深いしかも下手をすると心臓の脈が止まり死亡する恐れが出てきた。

「フリッピーどうしたの」

覚醒したばかりのフリッピーの目から涙がこぼれ始めた。

「そういえば何時かだったかランピーを殺害しようとしたときそれが自分の夢の中に出てきた表フリッピーと妄想し殺害活動を強制的に止めようとして涙が出たって聞いたことはあるですう。」

フレイキーも知ってはいた。

ラッセルは意識があるうちに回復させなければ死んでしまう。

急いだ皆はとにかくラッセルの緊急手当をするさまに。

うちはドルレインは次なる闘いの鍛錬を鍛えていた。

「時空葬憎」

20体ほどの鍛錬専用ロボットが壊れた。

「光遁摩天楼」

40体のロボットが光で破壊された。

四代目闇影うちはドルレインは血継限界を二つ持つ。

ひとつは、写輪眼をもうひとつは光遁を持つ。

蒼い万華鏡写輪眼を持っており、失明はしなくなっている。

しかも、マダラ同様、時空を利用しているんな所へ行ける。

仲間の一人、うちはタグラも蒼い万華鏡写輪眼を持っている。

ただし水銀ザクロは、別の血継限界を持っている。

体から、金属が出てくるといふ、特殊な能力。

そのため、刀は、水銀ザクロのチャクラが切れるまでいくらでも作れる。

フリッピーは元の姿に戻っていた。

「フリッピー気持は分かる苦しみがあるのはもうこれ以上犠牲者を
出させないためにという気持ちがあるだからだと思う。」

「それで、ラッセルさんの傷口は？」

「とうとうやってきたかと思ったよ。そいつはナチス科の植物たち
だ。」

「まさか」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、かつて東方植物戦争記や第六十八次世界植物大戦を平和という文字で終結させた者である。

闘いの混乱が、少しだけ消えうせたように思えた。

コンピューター情報

キャラクターナンバー 005

うちはドルレイン

闇隠れの里の長であり、光の闇九人衆の創設者である。

種族 人間

能力 光遁・写輪眼・火遁・風遁・雷遁・時空を思うように操る程度
の能力

性別 男

モットー 今宵の夜を冷たい闇で包み込む、冥府には温かい闇で包
みたい

テーマ曲 闇影として〜dark leader〜

第二十八話

フリッピーの涙（後書き）

まさかの展開が訪れます。そしてまたあの伝説デュエルがやってき
マス。

乾燥お願いします。

乾燥ではなく感想でした。

第二十九話

ビーボファイト再び前夜（前書き）

闘いは、次第に熱くなりて・・・

第二十九話

ビーボファイト再び前夜

トウダイグサ・スカーレット大佐「急げっトウダイグサ総合軍達H
OVに侵入するぞ。」

ポインセチア「いつものことだってこの落ち着き度は。」

どう見てもみんな落ち着いていない。

クルルは念のため、みんなと中継が取れるようパソコンとヘッドホ
ンを持っていた。

アイアイが「大丈夫だろうかあいつ等結構手ごわいよ。」

スニフルズ「僕達もH O Vに行こうよ。」

フレイキー「でもどうやって。」

トーヤ「ビットラボが使えます。」

水素「そうかあのビットラボとやらここに来るのに飛んでいたな。」

セイコー「ビットラボ発進。」

カウントダウンが鳴り始めて飛んだ。

ラッセルとペチュニアとギグルスとスプレンデイドはハッピーハウスにいた。

ラッセルの治療のために。

スプレンデイドは敵が来ないように用心棒の役目をはたしていた。

「さあ、何処からでもかかってきなウンコのような雑魚共は」

ヒーローが汚い発言するんじゃないよ。

トウダイグサ総合軍は「冗談も何もないことにびっくりしていた。

ギロロ「う、これは」

「おやおや君たち勝手にHOVのアジトに入るなんて礼儀を知らないのかね愚図ども。」

トウダイグサ・スカーレット大佐「こいつは一体何なんだよ。」

ロンワン「ふふ、こんなデジモンも知らないとは馬鹿にも程があるね。こいつの名はベルゼブモン究極体で魔王型のデジモンさ。こいつを改造し我々の兵器として扱いあの六世様にも売りつけるのさ。」

悪くないだろう。はっはっはっ」

覚醒フリッピー「生き物を兵器にするな。たとえビーボだろうがデジモンであろうがみんな元氣な生命体だ。そんなに粗末に扱うなら俺がてめえにベルゼブモンの苦しみ（ペイン）を味わえさせてやる。死ぬぐらいにな。」

みずき「ここがHOV」

ドルレイン「悪の組織だといわれているからな。」

ロンワン「笑わせるなそういえば君たち一回ビーボファイトしたんだってね。だったら俺のバトルフィールドで戦わないかい。そうすればビーボは返してやろう。可能性はパーセントにしか過ぎないけどね。」

覚醒フリッピー「いいだろうっ受けて立つ。」

皆の気持も繋がった。

遂にビーボファイトの時がやってきたのである。

しかしラッセルが発した言葉は、とんでもないことだった。

「ビーボファイトは罠だ。」

コンピューター情報

キャラクターナンバー 006

水銀ザクロ

血継限界の持ち主

種族 人間

能力 金属術・身体からありとあらゆる金属を取り出せる程度の能力

性別 男

モットー 金属の響きは、地獄の響き

テーマ曲 金属と蒼い真実

第二十九話

ビーボファイト再び前夜（後書き）

ラッセルが言ったことは恐るべき罨が潜んでいた……
ずっと前にブログを立てています。著者ですよ。

是非来て下さい。

名前は台風の如く現れて、severe tropical stormです。

緊急企画 今回は著者が考えたピーボ同士でファイト（前書き）

やりたい放題ですみません。

緊急企画 今回は著者が考えたビーボ同士でファイト

ビーボファイトのルールを確認しよう。

天は地に勝ち

地は水に勝ち

水は天に勝つ

ただしカウンターを使うと1・5倍にして返せる。ただし一ラウンドに一回のみ

よけるは一試合に一回使える。

カドルスチームのビーボはこちら

天族	ダークヘルロン	攻撃力62	防御力12	運26
地族	ビットニシキソウ	攻撃力38	防御力33	運29
水族	鈴山氷の助	攻撃力19	防御力35	運46

体力は423である。

H O V チームのビーボはこちら

天族	爆弾低気圧	攻撃力75	防御力15	運10
地族	ハリモグチン	攻撃力45	防御力45	運10
水族	海あらし	攻撃力25	防御力10	運65

体力は387である。

ラウンド1第一ターン

結果は、地対水であった。387 - 299 になった。

ラウンド1第二ターン

結果は、水対天であった。しかもここはH O V がカウンターを仕掛けていたのだが失敗した。299 - 243 になった。

ラウンド1第3ターン

結果は天対地であった。243 - 134 になりいい感じにいった。

しかしH O V は、ラウンドt w o からいきなり攻撃力を2倍に引き上げた。

ラウンド2第1ターン
結果は天対地であった。 1 3 4 - 2 0 となった。

ラウンド2第2ターン
結果は地対天であった。 4 2 3 - 2 1 8 になってしまった。

ラウンド2第3ターン
結果は水対水であった。 2 1 8 - 1 6 1 に 2 0 - 0 となった。

今回も勝利したのでいいのだが

「さすがだがこれで終わりだ。」

フリッピーは見た。

「なっ、何だあれは」

その巨大な物体はとんでもない力を発揮して何かが起こるまでは分からなかった。

ハッピーツリーワールド崩壊の危機迫る。

コンピューター情報

キャラクターナンバー007

ナットウダイ・スカーレット軍曹

トウダイグサ・スカーレット大佐の弟

種族 吸血鬼

能力 速さと焦りを操る程度 of 能力

性別 男

モットー 兄貴が考えていることは俺も賛成できる立場にいるのだから

テーマ曲 速さも焦りもこの刹那で

緊急企画 今回は著者が考えたピーボ同士でファイト（後書き）

今回は、信じられない展開が出てきます。お楽しみに感想よろしくね。

第三十話

夜の戦闘に備えて（前書き）

次第に展開が変わっていきます。そして・・・

第三十話

夜の戦闘に備えて

巨大な物体は刹那を呼ぶキャノン砲だった。

「どうだこれが殺戮の大砲だ。」

「あれを壊せばハッピーワールド崩壊の危機は救われるんですね。」

「そうだトーヤお前に言いたいことがある。」

「言いたいこと？」

「このハッピーワールドが崩壊したときお前の知っている。ビットワールドとリアルワールドそして俺の出身デジタルワールドは連鎖して崩壊する。五行の光を差し込めばあのキャノン砲は破壊

できる。トーヤこれ以上言つと俺の命が危ない後は任したぞ。」

「五行の光と言つても。」

「確か火の光がトウダイグサ・スカーレット大佐が言っていた場所に行けばあると思いますよ。」

「その心配はないぜ」

トウダイグサ・スカーレット大佐がやってきた。

「実は、俺が持っていましたー」

「それを早く言えよ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、どうやら調子こいていた。

「その次は水の光か」

あきれていたのは銀時だった。

フレイキー「確かハッピーツリーワールドにおいしい水があったですう。」

そこへ行くか。

皆は決断した。

しかしそこに敵がいることも知らずに

H O V 第三軍は水の光と木の光と金の光を持つ湖を囲んでいた。

「お前等、やつらが来たら殺れよ。」

コンピューター情報

キャラクターナンバー 008

ニシキソウ准尉

二次大戦で命散らした兵士達の霊が集合した者、武器は戦闘機や戦車などの悪霊が取り付いた妖鎌あやかしがまを持つ。

種族 人間の霊の集合体

能力 戦力の知恵を使うだけ使う程度有能力

性別 男

モットー 軍人の心得で平和を導いて見せる

テーマ曲 二次大戦の恨み

コンピューター情報

キャラクターナンバー 009

キモエリザベス・ザ・レンジャーモ

妖怪ペンギンとしての意ぼしじつを持つ

種族 妖怪ペンギン

能力 放射能真拳・危険な液体を吐く程度有能力

性別 女

モットー 私って結構きれい？

テーマ曲 放射能をあなたに捧げます

第三十話

夜の戦闘に備えて（後書き）

次回、emergencyなことが。感想お願いします。

第三十一話

第三軍を潰せ（前書き）

見えない展開を切り開けるのか？

第三十一話 第三軍を潰せ

第三軍のリーダーは酒を九杯も平らげていた。

そして

善の集団が現れた。

敵軍の攻撃パターンが変わっていた。

ビットワールド技術から植物と宇宙の技術を使っている武器にトウダイグサ総合軍は苦戦した。

「一体奴等は植物技術をどのように使ってたんだ。」

「こうなったらカードを召喚しなければ。」

カドルスが言うカード、エレメントカードと言う元素を武器として使うカードだ。全部で百十三種類もあるためどのカードを使うかは自由である。何度も使え仲間に武器を分けることも簡単に済んでしまうのである。エレメントスラッシュと言う機械はそのエレメントカードを使うために存在しているのだ。

「水素とヘリウム合体。大気核融合銃完成。みんなこれを使って」

「こんな形状の鉄砲使い方わかんねえがこれが発射ボタンか？」

ぽちつと押したとき黄色い閃光が解き放たれた。

そして敵軍を焼死させた。

皆は性能を知ったとたんとことん撃ちまくった。

そしてリーダーも焼死しに行った。

五行の光を火水木金を集めれた。

しかし残すは土だ。

どうやらビーボがその光を持っているらしい。

ロンワン「くっ、なかなかだ。しかし第二軍その前にベルゼブモンを倒せるのかな？・・・」

「ロンワンお前・・・」

ベルゼブモンは精神状態が不安定と化していきそして巨大化し始めた。

最大の危機が訪れようとしていた。

コンピューター情報
キャラクターナンバー010

タイフーンマンズ

新時代のヒーロー

種族 台風

能力 台風の出せる程度の能力

性別 男

モットー 悪身を蹴散らし善意を作り出す

テーマ曲 ヒーローとなった人間の脅威

第三十一話

第三軍を潰せ（後書き）

土の光はどこへ・・・感想よろしく

第三十二話

探せ新たなビーボ（前書き）

とんでもない展開が起こってしまいました。

第三十二話

探せ新たなビーボ

「このビーボ、土の光を持っているぞ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐が言った。

トーヤがビーボの正体を明かし始めた。

「このビーボビットニシキソウっていうビーボでビットワールドでしか咲かない伝説のトウダイグサ科なんですよ。」

「まっ、とにかく土の光も手に入れたし喜ばうじゃないか。」

ワイッと喜んでいたのもつかの間

「その喜び消してくれるビースキャン。」

そのあたりが爆発に見舞われた。

ゲット「みんなこっちに避難しましょうとにかく。」

ゲットとは、ウサギに変形するトランスフォーマーで月の力でデスクトロンを蹴散らした経歴もある。

「1111は、ど11」

「そういえばこのときのために作っておいた基地があるんだった。予備基地って言うんだ。ここでハッピーテンションズハウスと一緒に暮らしができる但し、本拠地と繋がっているのはいるが敵の本部へは行くことができない。」

フリッピーの解説があった。

巨大化したベルゼブモンは大砲に向かった。

シャドーコンボイ「ベルゼブモン排除作戦室を置こうじゃないか。」

五行の光が集まったとたん大砲を爆発させる時限装置が現れた。

「パスワード入力すれば大砲は大爆発する。」

「そうすれば？」

「ベルゼブモンは爆発に巻き込まれてジ・エンド。」

しかし、余計な細工をH.O.V.がしていたことに彼等は知らなかった。

コンピューター情報

キャラクターナンバー011

キッズウイン

可愛いけど雷鳴を引き起こす残酷なペンちゃん

種族 妖怪ペンギン

能力 聖なる雷を操る程度の能力

性別 男

モットー 僕の気持は必ず聖なる雷になっていろんな所へと行ってしまうから

テーマ曲 可愛くて残酷なペンギン〜疾風迅雷を呼ぶ聖雷〜

第三十二話

探せ新たなピーボ（後書き）

次回はさらなる展開が訪れます。評価と感想をよろしく

第三十三話

ヘルゼブモンを倒せ（前書き）

展開が最悪なほうに行ってしまう。

第三十三話

ヘルゼブモンを倒せ

パスワードを入力してください。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、あることに気付いた。

「これって、シャドーコンボイが知っているある五行トランスフォーマーのことかよ?」

シャドーコンボイはそうかと思い出した。

「五行トランスフォーマーは火、水、木、金、土を司りし、最強の集団。その中でリーダーなのは、金を司るレクイエムプライム」

「レクイエムプライム」

発射完了。

その時爆発が起こった。

ものすごく強い爆発。

「時限装置を使うとは殺したくなるなクツクツ。」

ロンワンはにやけていた。

しかし罠だった。

ベルゼブモンは軽い傷を負った程度しかも大砲は大破したもののその破片がベルゼブモンにくっ付いていった。

はめられたまんまと。

トウダイグサ・スカーレット大佐「なんと言っやつだ。平和穢す奴も許さんわが足元の死屍になれ。」

皆は戦いの準備をしていた。

「これ以上戦いたくないもう嫌だ。」

ベルゼブモンの心の声がハッピーツリーワールドに響いた。

ロンワン「新たな進化が始まるそうベルゼブモンクラッシュャーモードでっつて。」

「気まずい戦いになりそうだ。」

コンピューター情報

キャラクターナンバー012

フロッグマン

種族 妖怪蛙

能力 ブラックホールを自由に操れる程度の能力

性別 男

モットー 黒い穴は弾幕ですら吸い込むのが楽しくてたまらない

テーマ曲 黒き穴にある特異点の瞳 black hole eye

terrorist

第三十三話

ヘルゼブモンを倒せ（後書き）

次回に関して最悪です展開がどんどんわけがわからなくなりますが
ついてきてください。感想お願いいたします。

第三十四話

紅の未来（前書き）

お話がクライマックスになって来ました。ベルゼブモン戦ですが・・
ロンワン戦はまだなのですが今後の展開に期待してください。

第三十四話

紅の未来

ベルゼブモンと戦うと決意したのはグランドコンボイとオメガスプリームだ。

遂に戦いが始まろうとしていた。

怪我が少しずつ回復してきたラッセル、しかし彼は驚愕なことを口にした。

「奴らの第二軍が来る。」

グランドコンボイとオメガスプリームはリンクアップしオメガコンボイとして戦闘準備を整えた。

リンクアップとは、トランスフォーマー同士の融合のことである。

オメガコンボイとベルゼブモンクラッシュャーモードの戦いとなった。

「こうしている間にも敵は何かを企んでいる。」

トウダイグサ・スカーレット大佐「元・参謀ニシキソウ准尉、敵の行動探ってきてくれないか。」

ニシキソウ准尉「了解しました。大佐殿」

殴り合いがすでに始まっていた。

大きさ五百メートルあるうかぐらいの巨人二人が殴り合いをしていた。

オメガコンボイ「マキシマムファイヤー」

ドゴーンという爆音しかしベルゼブモンは効かないこの技が

「ユニクロンよりも手強い。」

ベルゼブモンの心の中はインプモンの姿があった。

「やめろ、H O Vお前らは大変なことを俺にしてくれたな許さんぶつ殺してやる。」

ロンワン「そうです。苦しみなさいベルゼブモンよあなたがリアルワールドでやった罪をここで償ってもらいますからね。クツクツンハーハツハツハツ。」

ベルゼブモンクラッシュャーモードは最悪狂気の技を出した。

「クゼーロバスターファイナル。」

大変危険なことが起こってしまった。

機能停止状態のオメガコンボイ

ベルゼブモンがオメガコンボイを踏み殺そうとしたとき、巨大な円陣がオメガコンボイを守った。

「耐えきれるかどうか」

うちはタグラによって守られた。

コンピューター情報

キャラクターナンバー 013

コニシキソウ三等兵

すべては、平和と争いの解決点にある。

種族 九尾

能力 九尾真拳・錦の炎をもたらす程度の能力

性別 男

モットー 一人一人には、因縁潰しがある。

テーマ曲 君も錦に染まれ } pride crush }

第三十四話

紅の未来（後書き）

今回もシリアスでした。というよりここんとこシリアスだらけでは
ありませんか？

感想お願いします。後、評価も

第三十五話

トーヤとトオルの作戦

(前書き)

怒涛の展開が待ち受けてます。

第三十五話

トーヤとトオルの作戦

うちはタグラは空中に巨大な円陣を作りオメガコンボイを守った。

しかし、問題が一つあった。

かつてウトアが口寄せの術が大暴走し無数のゴキブリの波が押し寄せたとき彼の円陣は五億匹のゴキブリつまり約五トンの力で破壊された。

今回はその五百倍に相当する力だ。

望みは一度きり

「オメガコンボイ早くその場を逃げろ」キツカーの声が意思を呼びオメガコンボイはうまく避けた。

そして円陣は崩壊した。

チャクラを消耗しすぎたタグラはばてていた。

トウダイグサ・スカーレット大佐がベルゼブモンの気を引きよせた。

「天の助、貴様またニンニクのおいがするぞ。」

「トウダイグサ・スカーレット」

「どうしたボーボボ」

「そいつ、ヴァンパイア吸血鬼対策にニンニクの香水をかけてるんだぜ。」

「それ言ったら、だめでしょー」

「てめー、俺をよける気か？」

「ボーボボの馬鹿ー」

「禁忌　おふざけは許さない」

「これだから、嫌いなんだー」

「天の助とトウダイグサ仲良くけんかしな」

テリハニシキソウ一匹狼兵は、おもしろいことを言った。

トーヤの円陣はワームホールを作りいろんな場所に転送できる画期的な方法だが攻撃力がほとんどゼロに等しい。

しかしある力が存在した。

トーヤがビットワールドにいたとき、アスミンのジャークビームをリアルワールドに転送しシャビやゾンビーボを撃退したこともある。

しかし謎の一面もあった。

トーヤはブックブック人と言うビット人からビーボや他のビット人が重たいものをそのマイランドまで転送できる円陣儀式を利用している点だ。

彼は元はリアルワールドの出身者であった。

つまりしんのすけや風間トオル同様リアルワールドの出身者が別世界に行つてその場所で得た能力がとてつもなく使えるということになる。

もうひとつ彼のビーボXAVIは彼自身が考えたビーボでブックブツク人が間違えてトーヤをビットワールドに送り込んでしまったと同時に誕生した。

風間トオルに関しては謎の世界で得た能力金色に輝く光槍を発動させて敵にぶつけると貫通できる。

攻撃力はS + Z Z Z Z Zである。

破壊力は大型飛行機に直径十キロの隕石がものすごい速さで正面衝突するぐらいの破壊力とほぼ同じである。

トーヤはひらめいたと言っている顔をした。

「トオルさん君の能力を使ってベルゼブモンを倒せるかもしれない。僕の能力は転送つまり君の能力とタッグを組めばベルゼブモンの心臓部を貫通できるかもしれません。」

トオルは少し焦ったが

「うん、コラボ技だねリスクは大きいと思うけどやってみる。」

遂にベルゼブモンとの最終決戦が始まる。

コンピュータ情報

キャラクターナンバー 014

ジェット・ヌーリ

霧隠れ七人衆のひとりで水のチャクラをナイフのように鋭くすることが出来る。

種族 人間

能力 水遁・水をナイフにできる程度の能力

性別 男

モットー 鬼鮫よりも鬼畜らしさが俺に気持ちがいい

テーマ曲 鬼より怖い鬼は俺様

第三十五話

トーヤとトオルの作戦

(後書き)

次回、ついに終止符？感想お願いします

第三十六話

究極的能力（前書き）

これから先が進み安い展開に

第三十六話

究極的能力

もはや一刻も猶予もないこのままだとハッピーツリーワールドが崩壊する。

これはとてもまずいことの始まりに過ぎなかった。

HOVは滅ぶと次の強敵を出していくそれが彼等バグハグ大王六世の手口だった。

ベルゼブモンクラッシュャーモードはオメガコンボイに攻撃を仕掛けたがオメガコンボイの攻撃と相打ちとなっていた。両者ともに同じ破壊力を持っているためまるで歯が立たない。

しかしオメガコンボイは不意を打たれた。

ベルゼブモンの動きが突然幻覚としてユニクロンに見えたからである。

そしてベルゼブモンに首を持たれ苦しむオメガコンボイ。

オメガコンボイは「そうとくれば再びマキシマムファイヤー。」

ベルゼブモンを自分の体から離れたオメガコンボイはばてていた。

ロンワン「くそっ、あと少しでオメガコンボイを殺せそうだったのに。」

ベルゼブモンは次なる攻撃をした途端、電撃がベルゼブモンを襲った。

オメガコンボイは「この電流10満ボルトはいつてるぞ。」

キッズウィンだ。

「聖雷呪符　雷と闇の誘い」

という名前のスペカを使っただけらしい。

ベルゼブモンの行動は止まらない。

破壊活動を活発にしようとした瞬間。

無数の円陣に囲まれた。

タグラの円陣だ。

しかもかなり弱い。

「今だトーヤお前の円陣を今すぐ出せ。」

「分かりました。」

円陣が現れた。

そして風間トオルが金色に輝く光槍を召喚した。

タグラの円陣が壊れたときトオルが光槍をトーヤの円陣めかけて投げた。

ベルゼブモンはトーヤが作った円陣を壊そうとしたのだが、光槍がベルゼブモンの心臓部に命中した。

ベルゼブモンはわめき声をあげながら消滅していった。そして戦いが終わったかのように見えた。

トーヤが「シャビがない。」

第二軍の香りがした。

「これはやばいな」

水銀ザクロは「そうだなもうこれ以上戦いが起こらないようにするには奴を撃退しなければの話。」

カドルス「久しぶりに腕になるよ。」

フリッピー「紅蓮、頼むもう一回あのコラボをやろっ。」

紅蓮「そのつもりさ、私も。」

瞬く間に消えた明星が再びハッピーツリーワールドの上で輝いた。

コンピューター情報

キャラクターナンバー 015

ダントル

寒冷化に登場するキャラ

種族 亀

能力 無の礎を操る程度の能力

性別 女

モットー 礎は簡単に無にすることができるから

テーマ曲 萃まれ亀の鼓動

第三十六話

究極的能力（後書き）

次回は、さらなる展開がありますのでご注目ください。
感想よろしくとブログも宜しく！

第三十七話

H O Vを叩きのめせ（前書き）

さて、最終回が少しずつ見えてきました。

第三十七話

HOVを叩きのめせ

ロンワンは作戦実行のためにいろいろ考えていた。

その時通信が入った。

「ロンワン作戦は絶好調か。」

「はいっ、邪魔が入ったせいで作戦の実行ができませんでありました。」

「邪魔一体誰だ。」

「はいっ、あなたの方で言う-shadowコンボイやグランドコンボイとトウダイグサコンボイです。」

「なに、サイバトロンだと、ふざけおって。」

「あなた達の知り合い的な敵もいました。」

「黒幕として伝えておく四大世界は何が何でも滅亡させる。それが俺が言った言葉だと伝えてくれ第二軍にな。」

「我々の敵は」

「心配するなそいつらも血祭りにあげるがいい。」

「はい、分かりましたよ。サタンガルバトロン様」

皆は第二軍のいる方向へと向かった。

しかし途中で邪魔が入ることには気づいていた。

アイアイ達はHOVのアジト本部に拉致されていたしかも傷だらけに。

ロンワンはアイアイ達の仲間のこと想知道いが口を利かないためアイアイなど五匹がロンワンにむちやクリオルドゼットという物で暴力行為を受けていたため、アイアイたちの体の一部から血がにじんでいた。

クリオルドゼットというのはサイバー空間の七大魔王の一人バグハグ大王の細胞とミロロギの細胞を金属に練りこんで作られた生命体。

一方

「たくつ、敵が待ち伏せしていたなんてどういうことだ。」

怒りがもろのトウダイグサ・スカーレット大佐

ベイビーが泣きながらこっちに来た。

それは

「アイアイ達が拉致されたでちゅー。しかも下手をすると死んじやうでちゅー。」

ポップの情報は間違いない本部アジトにアイアイ達がいることが分かった。

しかし一回の銃弾がトオルにあたりそうになったところをカドルスがかばったが角都の手におさめられた。

その時一つのクリオルドゼットが、みずきに襲いかかった。

「螺旋丸」

ナルトがクリオルドゼットを螺旋丸で吹き飛ばしたがクリオルドゼット軍団こそが真の第二軍だった。

土方は混乱した。

「こんなメカ共あつしのバズーカにまかして下さい。」

そう言ってバズーカから球を放った。

爆発音しかしクリオルドゼットには避ける力が存在していたため逃げられた。

クリオールドゼットが突然喋った

「トランスフォーム」

シャドーコンボイは驚いた。

ゲット「あいつ等、トランスフォーマーだったのかよ。だったらうつべしあるのみ。」

近藤「いやっ、それどこから得たのそのギャグ。」

ゲットは無視したと同時に

「フォースチップイグニッション」

月の力を持つゲットは地球で生まれた。

トランスフォーマー、環境を愛し、動物の一員であるウサギをスキヤンしビースト戦士になった。

そのため地球生まれなのにアニマトロスのフォースチップを使用しているのである。

「ムーンネクストバスター」

クリオールドゼットは吹っ飛んだ。

コンピューター情報

キャラクターナンバーXXX

バグハグ大王六世

種族 コンピューターウィルス

能力 壊れる者を強く儚くバグリンで波動させる程度の能力

性別 男

モットー バグハグ帝国を作ることそれだけだ

テーマ曲 凶悪無人の残酷者

第三十七話

H O V を叩きのめせ（後書き）

次第に近づくは、最終回。まだですがね。（笑）

第三十八話

第二軍なんか吹っ飛ばそう！（前書き）

嵐呼ばれたのは閻幻想郷と呼ばれた世界スペシャルです。
三話一気呵成に登場します。

第三十八話

第二軍なんか吹っ飛ばそう！

「くそ」

シャドーコンボイは困り果てた。

ライトマグナス「総司令官、リンクアップを。」

リンクアップを果たしたシャドーコンボイとライトマグナスは合体しレッドバードコンボイになった。

クリオルドゼットの攻撃が土方と沖田に襲いかかろうとしたとき、
一人の元総司令官が駆け込み攻撃を喰らってしまった。

ウィングセイバー「グランドコンボイ司令官。」

だが、ウィングセイバーもクリオルドゼットの攻撃を受けた。

うちはドルレイン「ここは早めに退散したほうがいいな。」

トウダイグサ・スカーレット大佐「一旦、退却だ。」

みんなは退却したのだが、クリオルドゼットの五体が追いかけてくる。

そこに、

「フォースチップイグニッション」

ギロロは気づいたこの声はあいつだと。

「ギャラクシーガードキャノン」

クリオルドゼット五体は、木端微塵になった。

ギロロ「お前、トウダイグサコンボイ。」

トウダイグサコンボイ「久しぶりだな、ギロロ伍長。」

レッドアラート「もしかしてあの破壊大帝オニユリガルバトロンを倒したといわれる伝説の総司令官トウダイグサコンボイなんだね。」

そしてあとから、スプリング、ジェットスクラインがやってきた。

トウダイグサコンボイ「グランドコンボイとウィングセイバーがこんな状態じゃないか。」

シャドーコンボイ「トウダイグサコンボイ、プライマスのエネルギーを使って復活できないだろうか。」

トウダイグサコンボイ「よしやるっ」

コンピューター情報

トウダイグサコンボイ

元・総司令官

テーマ曲 叫べ最強の総司令官

第三十八話

第二軍なんか吹っ飛ばそう！（後書き）

少し間をあけたのは、いろいろと忙しくてというより、この小説以外の著者物も存在しているんでなかなか苦労しますが其れが、楽しいんですよ。

第三十九話 信じた夢（前書き）

ちよつと切ないです。

第三十九話 信じた夢

グランドコンボイとウィングセイバーは瀕死の状態だった。

一方

クリオルドゼットを倒した者がいた。

サイバトロン軍だ。

本部にもう一つ影があった。水、金、火、木、土を司るトランスフォーマーがいることが分かった。

「ヒイラトロン、お前さんの武器でこの頑丈な鎖を壊せるか。」

「言われた通りやっているよ、レッグガー」

「静かにしろ二人ともどうにかしてここから脱出しなければ」

「そうだなレクイエムプライム。」

「こうなればダブルパンチ様の行動力で」

トガンと言う音で本部の壁が壊れた。

「よしっここから逃げるぞ。」

そして五体のトランスフォーマーはH.O.V基地の本部から脱出した。

グラントコンボイとウィングセイバーは倒れた状態だった。

「このままだと永遠に目覚めないよ。」

といったのはカドルスだった。

「確かにこんなところで、新たに二人の犠牲者を出すのは嫌だ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐も思う。

その時五行の光がランドコンボイとウィングセイバーに当たりそして二つの体が光った。

コンピューター情報

五行トランスフォーマー

火、水、木、金、土を司る最強クラスのトランスフォーマー金を司

る者がリーダーである。

テーマ曲 五行のトランスフォーム

第三十九話 信じた夢（後書き）

五行トランスフォーマーの登場によりすごい展開が！

第四十話

転生した弐体の戦士（前書き）

展開が見えていきます。最終回へ向けてレッツGO

第四十話

転生した武体の戦士

五行トランスフォーマーの視覚や聴覚は優れていた。

「どうも、我々の力が必要らしいな。」

「でもどうする」

「心配するな」

「フォースチップイグニッション五行転生光線激」

それはプライマスの作り上げた転生光線によく似ていた。

「フレイキー」まずい、生命力がもつすぐゼロに行きそうです。」

転生の光線が当たり二体の体は形を変えた。

トウダイグサコンボイ「もしや兄さん。」

皆はえっと思った。

グランドコンボイ改めギャラクシーコンボイ

ウイングセイバー改めソニックボンバー

この二人が生まれ変わった戦士

「これならいける」

フリッピーは確信した。

一方

ロンワン「ミーミーがマッドヒヒ教授がお前を愛したがつっていたのに嫌うとはな」

ミーミー「当然じゃない」

しかしこの後悲劇が待ち受けていた。

コンピュータ情報

牟陀

仏陀の子孫にしてセルインジー・キリストとは仲がいい神

種族 神

能力 卍を描き総てを綺麗にする程度の能力

テーマ曲 仏教信仰の意味を知れ

第四十話

転生した忒体の戦士（後書き）

次はハッピーツリーワールド〜ロンワン編〜の最後のスペシャルです。

近づいています。最終回が！

第四十一話 意外な真実（前書き）

第一シーズンの最後のスペシャルです。

第四十一話

意外な真実

カドルス達はビックリした。

ポインセチア中尉「それじゃ二人とも兄弟で総司令官歴があるということ？」

ギャラクシーコンボイとトウダイグサコンボイはトランスフォームすると形状は違うしかし、共に総司令官歴がありとても強い。

だが、クリオールドゼットが

「殺してくれる」

ギャラクシーコンボイはスーパーモードとなった。

トウダイグサコンボイもスーパーモードになった。

そして

「フォースチップイグニッション」

「ギャラクシーキャノンフルバースト」
「スーパーレッグギャラクシーキャノン」

クリオールドゼットは粉碎されて消えた。

そして

トウダイグサ・スカーレット大佐「今だ飛び込むぞ」

トウーシー「土遁根礫画」

基地に大きな穴があいた。

第四十一話 意外な真実（後書き）

今回から新コーナーはずしました。
最終回に近づいています。

第四十二話

本部へ飛び込め！（前書き）

二話目です。感想よろしくお願いします。

第四十二話 本部へ飛び込め！

トウダイグサ・スカーレット大佐は奇妙な空気を感じた。

全員をその場に止めた。

シャドーコンボイ「何か来るぞ」

ライトマグナス「分かってる」

ライトマグナスはみんなを安全なところへ避難させた。

HOVアジト本部の地面に赤く濡れたものがそこらじゅうに飛び散っている。

地面に這いつくばれている五匹の猿達。

シャビは恐怖に怯えていた。

そしてライトマグナスは

「フォースチップイグニション」

「必殺抹消礫裂雅」

その時煙の中から巨大な影が現れた。

フリッピー「なっ、ろ、ロンワン」

アングル「水素「何、ロンワンだと。」

ロンワン「フッフ痛いぞお前の攻撃は俺の左肩に命中したが小刀で軽く斬られたぐらいの痛みだ。」

ロンワンの拳がライトマグナスに直撃しライトマグナスは五百メートルまで吹っ飛んだ。

その結果体からバチバチとライトマグナスの体がひび割れが酷く殴られた衝撃で右腕が折れてかろうじて本体から離れまいとコードが神経のようになっていた。

シャドーコンボイ「ライトマグナス、くそっ、ロンワンお前は私が倒す。」

「シャドーコンボイスーパーモード」

しかしロンワンのパンチがシャドーコンボイに命中した。

カドルスとフレイキー「これでは勝てない。」

トウダイグサ・スカーレット大佐「トーヤ、シャビは無事だ。」

しかしタカトウダイ中佐が来たとき恐れていたことが起こってしまった。

そこらじゅうが血で染められていた。

そして「大佐殿、大変です。」

「どうした。」

「これを」

「むじいむじすきる」

そして血まみれになっている五匹の猿を救った。

タカトウダイ中佐「まだ、心の鼓動が聞こえるので間に合ったといえます。」

トウダイグサ・スカーレット大佐「俺はロンワンを殺す。タカトウダイ中佐頼んだぞ。」

「分かりました。大佐殿」

トウダイグサ・スカーレット大佐の体が見る見るうちに変わっていった。

そう本来の姿に戻ろうとしていた。

実はトウダイグサ・スカーレット大佐は仮の姿でみんなと一緒に行動しているのだ。

そして本来の姿に変わっていったトウダイグサ・スカーレット大佐

「ロンワンよ、お前の血肉と血を喰ってやる覚悟しろ。」

本来の姿から生えている翼は残虐かつ恐怖の紫色をしている。

ロンワンとトウダイグサ・スカーレット大佐の戦いの運命はある者に見られていた。

「ふんっ あんな下らん戦い」

第四十二話

本部へ飛び込め！（後書き）

残酷描写がありました。が、あまり少ないと限りません。次でスペシヤルラストです。

第四十三話 戦いが起こる頃に（前書き）

ラストです。スペシャルが・・・
次第に終わりが近づいてきました。

第四十三話 戦いが起こる頃に

本当の姿になったトウダイグサ・スカーレット大佐はものすごい威圧感がある。

「殺気力が仮の姿とはケタはずれだぜえ。」

アングル「水素」そういえば、拙者と同様光の闇の者九人衆でトウダイグサ・スカーレット大佐がエントリーされていた。しかもドルレインやタグラもそこにいた。」

フレイキーがトウダイグサ・スカーレット大佐の体から出る異常なほど強いオーラを見ていた。

「植物天征」

大気がゆがんだしかし、何かが違った歪むスピードが明らかに遅い。

「みんな、俺の植物天征はパワー溜めをしている早く攻撃をしてあいつを弱らせるんだ。」

そこにカドルスが「風遁台風螺旋丸」

みんなの力が結集し次第に力が弱まっていくなワン
「くそどもがー邪悪遁解夏界死亡哩血。」

トウダイグサ・スカーレット大佐が

「95%まで歪んだ。もう少し早めの攻撃をさせてやれ。」

ペチュニア「でも、みんなが」

「大丈夫だ、植物天征の最大奥義を使ってロンワンを殺す、そのあとはロンワン撃破記念のパーティーでも開く、疲れを癒す為にな。」

ナルト「トウダイグサ・スカーレット大佐の言う通りだってばよ。一人の力がどれだけ強くてもみんなが加われば更に強くなるっ言うことだってばよ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐の笑みがこぼれた。

ギロロ「ふんっ、冗談もいいと言っし逆らわれん俺も参加する。」

シャドーコンボイ「今、大佐がやっていることより先にロンワンの体にとにかく傷をつけることが先決だ。」

「よしっ、行くぞ。オーウ」

「生意気だな、デストロンのこの俺がひねりつぶしてくれるわ。」

果たしてこいつは、一体何者なのか新たな刺客が浮き彫りになる中、みんなはロンワンを倒すことができるのか。

「そろそろ支配の時間かな？」

第四十三話 戦いが起こる頃に（後書き）

さあーいよいよ、最後のスペシャル終了し、よかったですと思いますが、
第一シーズンの次は第二シーズンが待ち伏せしているんですねーこ
れがまた・・・

第四十四話

諦めない心（前書き）

ついに戦いに終止符が打たれる。

第四十四話

諦めない心

ロンワン「バグハグ大王六世様のたたりが来るぞ。」

究極の力が発動し始めた

トウダイグサ・スカーレット大佐は「植物天征・閻魔」

爆音とともに爆風が来た。

「みんな早く安全な所に。」

「すごい威力だ、でもあいつには勝てない。」

カドルスが「どういうこと」

クルルは「攻撃力が35万、防御力が60万、素早さが140万と
いうことは本当の姿は近だけ恐ろしいってわけねえ。」

仮の姿でも攻撃力12万、防御力37万、素早さ75万のトウダイグサ・スカーレット大佐は倍以上に力を発揮できていた。

一方リアルワールドではあるメカが動き出そうとしている。

そして謎のシルエットがこう喋った

「行け、メカミ君共。」

ハッピーツリーワールドに戻した。

元の大きさになったロンワンは体が傷だらけになっていた。

「てめえ、バグハグ大王六世様の逆鱗にまたひとつ触れたことになるぞ。」

飯の姿に戻ったトウダイグサ・スカーレット大佐は

「力だけでは物事は解決しない。バグハグ大王六世という者の手下であるお前に光の闇九人衆の一人の力には抑えきれなかっただろうな。」

ロンワンは手に持っているナイフを投げた。

カドルスの左腹に刺さり、出血をした。

「カドルス」

ギグルスが涙声でカドルスを呼び掛けた。

「医療奥義シェイクスピア」

カドルスの左腹に刺さっているナイフが簡単に抜けた。

「医療奥義サントペテルギウス」

傷口がふさがり始めてた。

「ギグルス、ありがとう」

「ふうー」

フリッピー「こいつでとどめを刺す。」

第四十四話

諦めない心（後書き）

戦いは終わりそして第一シーズンも終わります。

第二シーズンの題名は

ハッピーツリーワールド〜レーザーウェーブ編〜です。

感想よろしくお願いします。

第四十五話

永劫の剣が向かれた時（前書き）

第二シーズンに続くような描写があるのでご注目あれ。感想よろしくね

第四十五話

永劫の剣が向かれた時

フリッピー「ロンワンお前は、バグハグ大王六世の企んでいることは分かっているのか。」

ロンワン「お前らに忠告しておくハレルヤランドは今は、Aブロックになっている。」

なんと、ハレクラニが怒りそうなことが、ある。

しかもリアルワールドでは大変なことが

メカミ君がメカミ君が

「プルコギプルコギ」

「なんでプルコギおどっとんだー」

「たくっ、このレーザーウェーブを突っ込み入れさせやがって」

「なあ、コロシック。」

「排泄物が、馬鹿もの」

「お前誰だー」

「シーモータータSIMONET4913型です。」

一方ハッピーツリーワールドでは

ロンワンに喰らわしたジャークビームが見事命中

ロンワン「おかげで元気なっただぜ。」

アングル「水素」ならば拙者のルシファーセイバーを」

「酷斬真拳奥義テリユーザバイゲリオン」

「ギヤー」

ロンワン死亡撃破

フレイキー「やったロンワンが倒れたー。」

「これ僕たちの出番も無くなったね。」

エピソードに続く

第四十五話

永劫の剣が向かれた時（後書き）

最終回がついに来ました。エピソードでロンワン編は完結します。感想と評価のほうを宜しくお願いします。

epilogue

帰還する者（前書き）

ロンワン編完結です。そして、50話ジャストで終わりました。感想とご評価をお願い致します。ご鞭撻の方もお願い致します。感

epilogue

帰還する者

ハレクラニは「ん、仲間からメール。」

「ハレクラニ、お前の基地がハイジャックされていたことが分かった。俺達が来るまでユニクロンから一歩も動くなb y t ウダイグサ・スカーレット大佐」

「そうか、分かったよ。」

OVER「極悪斬血真拳奥義力ボス」

「ハレクラニここをいったん退くぞ。」

「しかしOVER」

「いいから」

「なんで退くの」

「待てー」

「手を出したからかー」

「ゴージャス真拳奥義ゴールデン・フェニックス」

ユニクロン内で戦闘が始まってしまった。

セイコー「もし何かあったら僕達を呼んでよ。」

セイコー達はビットワールドに帰った。

「リアルワールドに戻ります。」

「じゃーね」

カスカベと電子探偵団も帰ったのだが

リアルワールドが大変なことになっていた。

メカミ君がなんと90億体いた。

レーザーウェーブが主将だ。

その内の5千体が電子探偵団の代わりにメカミ君が行ってしまう。

「ロンワンの仇はとりに行くぜー」

「**は、***だ。」

「てめー変なこと言ってるんじゃないぞーぞー」

果たして次章はどんなことが起こるのか

ペチュニア「ロンワン編完結したけれど？」

カドルス「出番なくなるのは、あいつだね。」

ロンワンは死んでいるため出番はない。

フリッピー「長かった、戦いはいったんおしまいだね。」

ロンワン編

完全的終演

epilogue

帰還する者（後書き）

ハッピーツリーワールド〜レーザーウェーブ編〜が20日にスタートします。

感想と評価のほどを宜しくお願いします。

また、新連載いきなりにしてスペシャルがあります。

始動レーザーウェーブ編スペシャルです。お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1368i/>

ハッピーツリーワールド～ロンワン編～

2010年10月15日22時14分発行